

清末期における張謇氏の教育改革の考察

—日本人教習の誘致や日本の教育制度の受容をも考えて—

京都外国語大学大学院博士前期課程 王昊天

はじめに

本発表は中国教育の近代化過程における中国江蘇省通州の中心人物である張謇氏の教育改革と日本人材の誘致や日本の教育制度の受容に関して、張謇の教育改革の背景、通州師範学校の日本留学生、張謇が招聘した日本人教習について考察するものである。とりわけ、本大学・京都外国語大学歴史ともかかわる吉澤嘉寿之丞と森田政夫婦の中国南通での中国の師範教育事業への貢献に関する点も考察する。

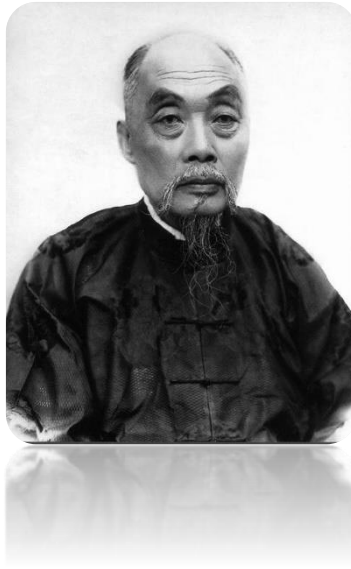
本発表で取り上げる「教習」とは明の時代に翰林院で進士の師となる者を指し、のちに官職名として使われるようになった。この制度は清朝でも採用され、清朝末期に新式学堂が始まると、新式学堂の教師は「教習」とも呼ばれるようになった。

「通州」は清の時代の地名である。中国の首都北京にも「通州」という地名があるが、本発表でいう「通州」は江蘇省の「通州」を指し、南に位置することから「南通州」とも呼ばれ、現在では江蘇省南通市となっている。

(1) 研究背景

張謇氏（1853～1926）は中国近代著名な民族資本家、「実業による国を救う論」「教育による国を救う論」の代表的な人物として、日本の渋沢栄一に肩が並べられるほどの人物である。

張謇氏は実業と政治以外、教育分野でも活躍していた。中国最初の師範学校通州師範学校「現・南通師範高等専科学校、以下「通師」と略す」を創設し、実業家であると同時に、教育家と言っても過言ではないと筆者は評価する。



張謇氏(1853～1926)

中国で唐の時代に始まった科挙制度は、試験を通して優れたものを官吏に登用させ、一般庶民でも、学習・試験を通して官吏になり、上級階級に入る手段となった。それゆえ、清朝末期までの中国では、自然科学分野の教育は比較的軽んじられており、完全な教育制度は築かれなかった。

現在の中国の教育制度は近代に入り、徐々に発展してきた。清朝末期、中国は西欧列強の侵略を受け、半植民地社会と化した。一方、日本は明治維新後、急速に発展し、日清戦争後、この時代の中国人は日本の力を十分に認識していたため、各分野では、日本に学ぼうとする姿勢を打ち出し始めた。特に教育の分野では、当時の教育制度は日本をモデルにしていたと言える。

1902年、清国政府の管学大臣であった張百熙氏らにより、中国における近代学校制度の確立の始まりとされる「欽定学堂章程」が制定された。しかし、この「欽定学堂章程」は公布されたものの、実行されなかった。その後1903年に日本の学校制度に基づいて「奏定学堂章程」が公布され、1904年1月から中国全国で実施されることになった。教育近代化を推進する際に、当時の有識者は国内の人材「内才」に協力を求める一方、多くの「外才」、とりわけ日本人を顧問、或いは教習として招聘し、日本人

材の活動に期待をかけた。そして、中国に渡ったこれらの日本人教師は、当時、“日本人教習”と呼ばれていた。

日本人教習に関する最も早く、かつ最も本格的に研究しているのが、1988年に出版された汪向荣氏の『日本教習』（注1）であった。汪向荣氏は本書で清朝末期、1911年の辛亥革命まで中国で働き、生活していた日本人教習の実態を中心に詳しく研究している。そして、次のような指摘がなされている。

1、清朝末期、日中間の文化的地位の逆転を背景に、日本文化の中国への流入が大きな流れになった。

2、多くの日本人教習が中国に渡ったには、中国から厚遇の魅力に加え、日本政府が自国の利益を実現し、文化によって中国を支配するためにも大きな原因であった。

3、これらの日本人教習による中国での教育は、言葉の壁などさまざまな理由でその質はまちまちであったが、総じて中国の教育の近代化に大きく貢献した。

これらの知見は、現在ではほとんどの研究者に受け入れられている。しかし、上記の知見のうち、特に2番目について、汪の研究では、この時期に中国で学校を開いた日本人や、中国政府が運営する官立学校の一部の日本人を対象としており、「通師」などのような私立学校の日本人教習には触れていなかった。それゆえ、本発表では、「通師」という私立学校で働いた日本人教習を中心考察することにする。

この時期、通州地域の教育の発展は、中国全土の最先端を走っていた。20世紀に入った時には、幼稚園、小学校から高校、師範学校、女子学校、各種専門学校まで、より総合的な教育体系が確立されつつあった。特に、張謇氏が設立した「通師」は、南通地域に多くの優秀な人材を輩出しただけでなく、陝西省、山西省、甘肅省から学生を受け入れ、これらの学生卒業後は地元の教育の中心となっていた（注2）。

通州地域の教育の発展も、日本からの影響と切り離せない。1903年、日本が大阪で第5回内国勸業博覧会を開催した際、張謇氏は当時の在江寧日本総領事（江寧は現・中国江蘇省南京市）である天野氏の招きで、4月25日の上海行きから始まり、4月27

日日本の船「博愛丸」で出発し、6月6日に上海に戻るという約70日間の日本（関西地域）で実地考察を行っていた。この間、張謇氏は日本の産業、商業、教育の実情に着目し、その実態を考察していた。特に、小学校と女子学校を中心として見学した（注3）。張謇氏は帰国後、南通に日本人教習を何人か招き、さらに、教員や学生を日本に留学させた。そして、これらの人々の活動は、南通地区の教育の発展と日本との結びつきを示す証拠であると思われる。

中華人民共和国建国以来、張謇氏に関する研究は途切れることなく続けられ、特に企業経営と政治活動の分野で、中日両国でも盛んに行われている。一方、教育分野に関する研究では、「実業」と「政治」よりずっと少なかった。特に教育理念、日本人教習、学校創設や博物館創設の背景など、多くの研究課題を抱えている。

張謇氏の教育改革における先行研究を幾つか紹介する。

蔭山雅博（1992）は張謇氏創設した「通師」で働いた7名の日本人教習の活動を調査し、清朝末期「日本型」学校制度の導入を研究していた。張謇氏の教育改革構想をより詳細に分析し、張謇氏が採用した7名の日本人教習が十数年間中国南通に滞在した際の様々な活動に焦点を当てている。

劉佳（2018）は、明治35年に起きた教科書の疑獄事件（注4）を軸に、「通師」で働いていた7名の日本人教習の日本での経歴や中国渡航の理由を、とりわけこの事件に関わった西谷虎二、遠藤民次郎、木村忠治郎に焦点を当て、考察し、「彼（張謇氏）の人材採用に対する考え方は、「実用主義」な人材観とも言える」と結論をつけている。

日本人教習の在中活動については、劉佳（2019）は1904.8～1911.1の間に「通師」で働いていた木村忠次郎の教育実践活動に関することを研究し、木村氏が広めた教授法の理論の分析・研究に重点を置いている。一方、金海蓮（2006）は、張謇氏が設立した南通博物苑の草創と発展における木村忠治郎の努力と貢献について考察している。

これまでの研究では、張謇氏が「通師」に採用された日本人教習の人数は7名とされている。しかし、『南通師範学校史』には「学校不惜重金先后礼聘了木造高俊、西谷

虎二、木村忠治郎等 8 位日籍教習来校任教（学校「通師」では、木造高俊、西谷虎二、木村忠治郎を含む 8 名の日本人教師を招聘した。）という記録があった(注 5)。筆者は、「通師」の後身である南通師範高等専科学校に確認した結果、この 8 人目の日本人教習は算数・理科教習吉澤嘉寿之丞氏の妻、通州女子師範学校の教習として働いていた森田政氏（注 6）であることが判明した。現存している「通州師範学校教習表」と「女師範教習表」（注 7）により、張謇氏が設立した私立の「通師」は京都外国語大学の創設者・森田一郎氏の両親吉澤嘉寿之丞と森田政夫婦が「教習」として教鞭をとっていた学校だったことが分かった。曹炳生、都越の『吉澤嘉寿之丞和森田政夫婦在南通任教档案資料集』（注 8）では、吉澤嘉寿之丞が 1904 年から 1914 年までの 10 年間、「通師」と如皋師範学校で数学、理科、製図を教えていた。また、1916 年に松本亀次郎とともに東亜高等予備学校を共同設立したという。森田政は通州女子師範学校の教習を職務していた以外、張謇氏の長男である張孝若氏の家庭教師も担当していた。この研究が本大学創設の背景の一端が窺える。

この時期、中国社会では、日本人の人材を積極的に採用することに加え、日本への留学もブームとなった。1978 年に日本国立教育研究所が行った調査によると、1906 年だけで日本全国の公・私立学校の中国人留学生の総数は 7,283 人にのぼったという。

張謇氏の「通師」は、1904 年から 1909 年にかけて 14 人の学生を日本に留学させていた。

「通師」の 14 名の日本留学生について、二つの先行研究を次のように取り上げる。

朱嘉耀(2005)は、14 名の日本留学生の派遣の目的を研究し、次のように指摘している(注 9)。

「其主要目的：一是为通州师范学校和南通地方发展新式教育迅速培养一批优秀而可靠的师资人才；二是为南通地方社会和经济的发展培养近代化的建设人才。」

（その主な目的は、第一に、「通師」と南通市の新型教育の発展のために、優秀で信

頼できる教師を早くたくさん育成すること、第二に、南通市の地域社会と経済の発展のために、現代化実現のための人材を養成することである。)

劉佳 (2019) は、これらの留学生らが、帰国後、その能力を教育現場で発揮しただけでなく、学校の運営、教育体制や組織構成の改革にも意欲的に取り組んでいた。特に于忱と尤金緘 2 人については、劉佳は「完全な近代的師範教育の管理体系が作り上げられ、民国時代の学校の飛躍的な発展の基礎をしっかりと築いた」と絶賛している(注 10)。しかし、劉佳の研究はこれらの留学生に関する具体的な調査は行われなかった。

本発表では、これまでの研究を踏まえ、清末期における張謇氏の教育改革が果たした役割について検討し、とりわけ先行研究の中であまり取り上げられていない部分については、より詳細な史実を明らかにする。

(2) 研究方法

本発表は史的な研究が主で、史料・文献の調査や分析を主な研究方法とすることにする。上記の諸問題をめぐって、中国と日本の関連史料・文献を収集し、その信憑性を検証しながら、中国と日本の史料を検証する。これに加えて、細部が欠落している文献については、三段論法などの推論法を用いて幾つかの仮説を合理的に推論するという方法をとる。これまでの張謇研究の教育分野では見落とされてきた問題にも、スポットをあてて、より詳細な情報を補足し、私見を述べる。

信憑性を確保するため、収集・分析する史料は原語の本を主とし、原則として翻訳本を分析に含めないこととする。また、中国語の文献の日本語訳は、筆者自身が翻訳したものである。

中国側の文献収集の方法は主に二つあり、一つは電子学術データベースを利用して清末民国時代の政府文書、新聞、地方誌の一部を検索すること、もう一つは張謇氏及び関係者の著作や日記を検索することである。また、『張謇辞典』(注 11)など、これ

までの研究成果も重要な参考資料とする。

日本側では、主に国立国会図書館が開発した文献検索システム「CiNii」を使って検索・収集する。このほか、各大学の図書館に所蔵されている資料も収集している。

(3) 本発表の構成

本発表は序章、終章を含め、五つの章から構成される。

第1章は、3つの節に分け、清朝末期における張謇氏の教育改革の措置及びその背景について考察する。第1節では当時の社会文化・教育制度の変遷を調査し、張謇氏が教育改革に取り組んだ外部環境を明らかにする。第2節では張謇氏が教育改革活動を行っていた前提の一つとも考えられる彼の権力、リーダーシップ、先見性に関して考察し、とりわけ当時の地方自治における教育自治の現状を明らかにする。

第2章では、3つの節に分け、「通師」の留学生の活動を考察する。第1節では、「通師」の留学生の活動を考察し、当時の日本留学生の実態を明らかにする。第2節では「通師」が留学生の派遣の原因を考察し、なぜ他国ではなく日本に留学生を送るようになったのか、その疑問点を中心に派遣の背景を考察する。第3節では、南通地域の教育近代化における、「通師」の日本留学の学生の役割を考察し、彼らの歴史的貢献について調査する。

第3章では、2つの節に分け、張謇氏の日本人教習の誘致について考察する。第1節では、張謇氏が日本人教習を招聘した背景を考察し、その目的と理由を明らかにする。第2節では、本学・京都外国語大学の創設者である森田一郎氏の両親である吉澤嘉寿之丞氏・森田政夫妻に関する考察である。2人が中国に渡った経歴を調査し、張謇とどのように出会い、なぜ通州へ教師として渡ったのかを探り、中国での教育実践活動を総合的に考察し、当時の中国の新式師範学校、特に私立師範学校で教える日本人教習の実態を明らかにする。さらに、なぜ2人が日本に帰国後も中国人留学生の教育を続けたのかを検証し、本大学創設の背景の一端を浮き彫りにさせる。

注

- 1、汪向荣『日本教習』 三聯書店 1988年

著者は日本の京都帝国大学を卒業後、中国に帰国し、中国社会科学院の副研究員として働いていた。

- 2、張孝若『最艰难的创业者 状元实业家 张謇传』 新世界出版社 2016年

- 3、張謇『癸卯东游日记』 翰墨林印書局 1903年

4、1902年(明治35年)、日本で発覚した、学校の教科書採用をめぐる教科書会社と教科書採用担当者との間の贈収賄事件である。

- 5、朱嘉耀『南通师范学校史 第一卷 纪事』 p194

南京師範大学出版社 2012年

6、張謇本人による森田政氏の記録は「森田政子」だが、森田家の親族によれば、実際の名前は「森田政」である。

- 7、『通州師範学校職員表・学生録 宣統三年』 p41-42 翰墨林印書局 1911年

8、曹炳生と都樾編『吉澤嘉寿之丞和森田政夫婦在南通任教档案資料集』(非売品)、2018年

- 9、朱嘉耀『南通师范学校史 第一卷 纪事』 p194 南京師範大学出版社 2012年

10、劉佳『張謇の南通における近代教育普及への貢献：日本モデルの教育制度の受容を中心に』 p167 東京学芸大学博士発表 2019.9.25

11、『張謇辞典』は、揚州大学の周新国教授を中心とする江蘇省社会科学研究プロジェクトである。張謇の曾孫である張慎欣との共編著で、2021年に広陵書社から出版された。これまで張謇の研究を辞書ツールの形でまとめられたものである。

第1 張謇氏の教育改革の措置及びその背景の考察

本章では3つの節に分け、清朝末期における張謇氏の教育改革の措置及びその背景について考察する。第1節では当時の社会文化・教育制度の変遷を調査し、張謇氏が教育改革に取り組んだ外部環境について調査する。第2節では張謇氏が教育改革活動を行っていた前提の一つとも考えられる彼の権力、リーダーシップ、先見性に関して考察し、とりわけ当時の地方自治における教育自治の現状を明らかにする。

筆者の主張は①張謇の教育改革は、時代の発展と密接に結びついたものであり、歴史的な背景に直視する必要がある。②張謇氏は教育改革を行っていた前提の一つ、彼の権力の源は政府であり、中央集権体制が徐々に崩壊しつつある清朝末期においても、張謇氏の教育改革は政治的影響から解放されていなかった。

上記に挙げた筆者の二つの主張について、各節で説明する。

(1) 清朝末期における教育制度の変遷

清朝は中国史上最後の封建王朝であり、最初は1616年のヌルハチによる「後金」政権の樹立に始まり、1636年にホンタイジが「大清」と国号が変えられ、1644年に北京を征服して国権を確立した。1616年から1912年に清朝最後の皇帝が退位するまで、296年の歴史をもっている。

清朝末期は「晩清」とも呼ばれる。清国が長年続けてきた「鎖国」(注1)政策の結果、国力は次第に弱くなっていた。1842年、第一次アヘン戦争に敗れた結果、清朝政府は英国と中国近代史上初の不平等条約である『南京条約』を締結した。それ以来、中国は徐々に半植民地、半封建的な国家に成り下がっていった。本発表でいう清朝末期とは、1840年から1912年の清朝滅亡までの72年間を指す。

1.1 「天朝上国」の破滅と新式教育の興起

1840年、第一次アヘン戦争が勃発し、1842年、清朝は大敗を喫したことによって、

『南京条約』が調印された。1856年、英国と仏国は連合軍を結成し、米、露の支持を得て、第二次アヘン戦争を起こした。1858年、第1次大沽口戦役の失敗によって、清は英、仏、米、露四国と『天津条約』を締結し、1960年、英仏連合軍は北京に侵攻し、圓明園を焼き払ったすえ、『北京条約』が締結された。この2つの戦争の惨敗によって、古来より中国社会を支配してきた「天朝上国」の思想は一気に崩れ去ってしまい、支配者から民衆に至るまで、西洋の力を十分に認識するようになった。

そして、この時期から中国の新式教育が始まっていた。

1.1.1 洋務運動と新式学校

二度の戦争に敗れた後、当時の有識者たちは、西洋に学ぼうとする考えを打ち出した。1861年、富国強兵を目的として、西洋の先進技術の習得の「洋務運動」が始まり、そして、30年余り続いていた。

前述した『天津条約』の重要な点は、西欧列強に清朝の主要な商業港口と首都北京での領事権を与え、通商や大規模な布教など、様々な外交活動のための領事館を開設させたことである。その結果、この時期から中国へ渡った外国人の数も大幅に増加した。

また、洋務運動に西洋の先進的な科学技術を導入することは、外国語に堪能な翻訳者の協力なしには実現できなかった。そのため、この時期、政府から社会各界まで、外国語人材の需要が高まっていた。そして、外国語人材を育成するための方言学堂が機運に乗じて誕生した。以下の表1、当時の方言学堂の一覧である（注2）。

表1 方言学堂の一覧

年	学校名	地域
---	-----	----

1861年	京師同文館	北京
1863年	上海広方言館	上海
1864年	広州同文館	広州
1887年	新疆俄文館	新疆
1887年	台湾西学館	台湾
1888年	琿春俄文書院	吉林
1893年	湖北自強学堂	湖北

外国語人材の積極的な育成に加え、科学技術人材や軍事人材の育成に特に力を入れていた。この時期、洋務派は13の技術専門学校と10の軍事専門学校を開設した。

洋務運動では、「富国強兵」に直結する外国語、技術、軍事の3分野を中心に、次々と新式学校が設立されたが、政府は教育制度、特に科挙制度に改革をかけることはなかった。それゆえ、この時期、中国の教育はまだ近代化に向かつてはいなかったと思われる。

1.1.2 日清戦争の戦敗と日本学制の導入

洋務運動の推進によって、中国は軍事的・経済的に大きく改善し、「富国強兵」の目標を達成したかにみえたが、1894年に日清戦争が勃発し、清朝政府が誇っていた北洋水軍は全滅してしまった。この結果は、洋務運動を終結させたとともに、中国に日本の力を見せつけることになった。その後、西欧から学ぶという流れから、次第に日本から学ぶという流れに変わっていった。

そして、日本の学校制度を学ぶ過程で、以前の洋務運動とは異なり、制度的方面からの学習が始まったと思われる。特に教育領域で、学校制度はほぼ日本をモデルに模倣した。1903年、日本の学校制度に基づいて「奏定学堂章程」は中国全国で実施され、中国の近代的な学校制度が確立された。図1（注3）と図2（注4）は、この時期の日

本と中国学校制度の概略を示したものである。

図1 日本の学校制度 1900年

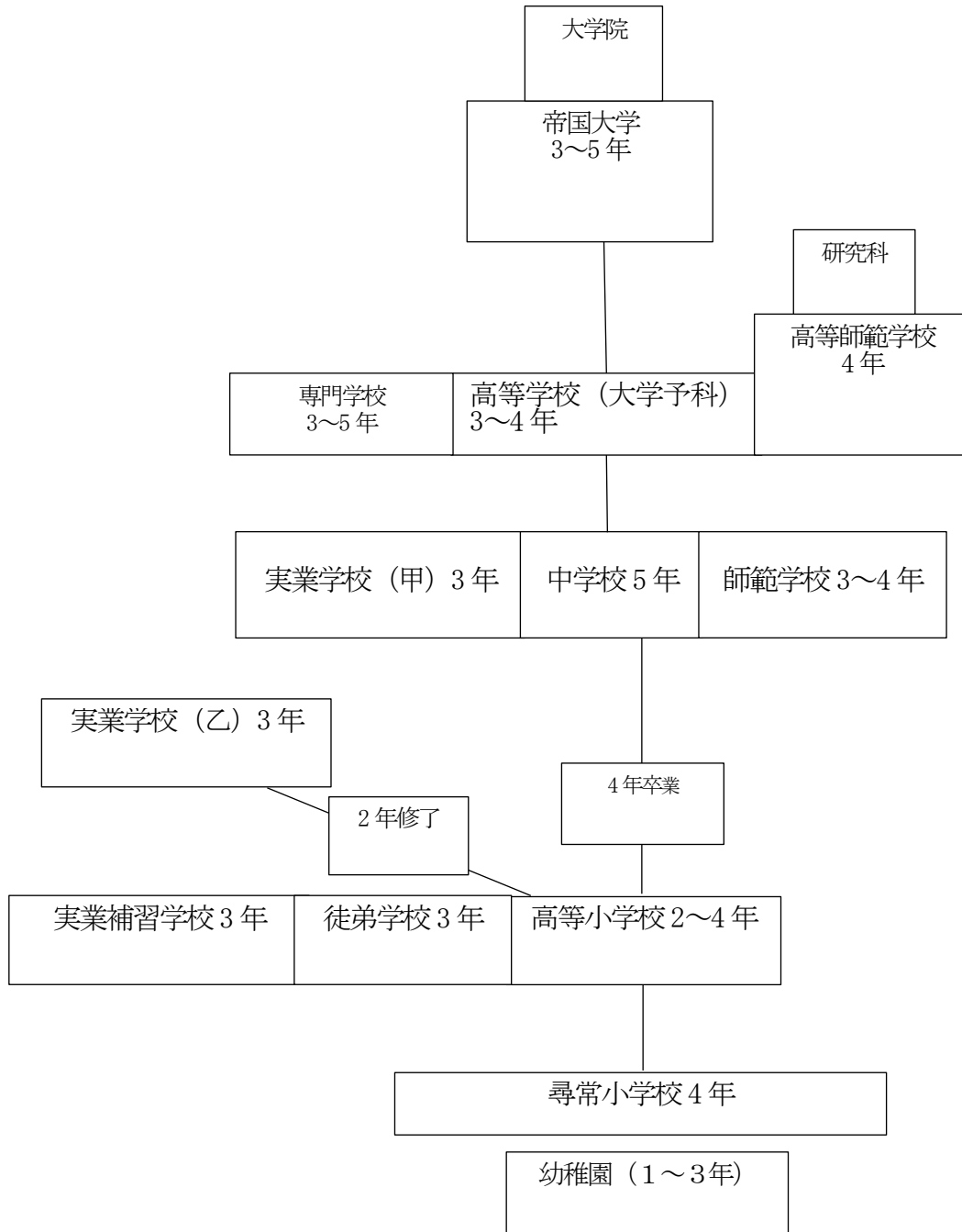
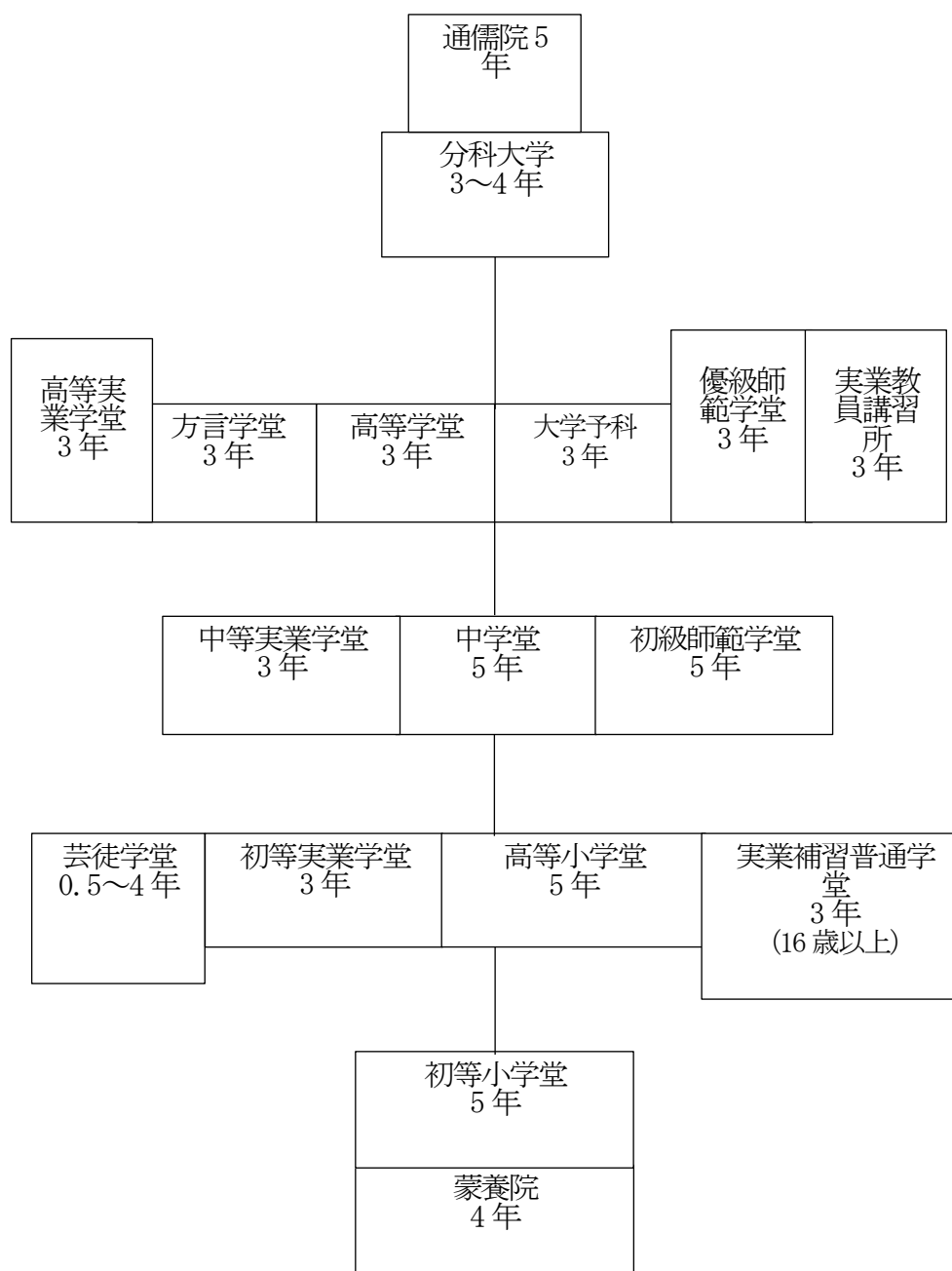


図2 中国の学校制度 1904年

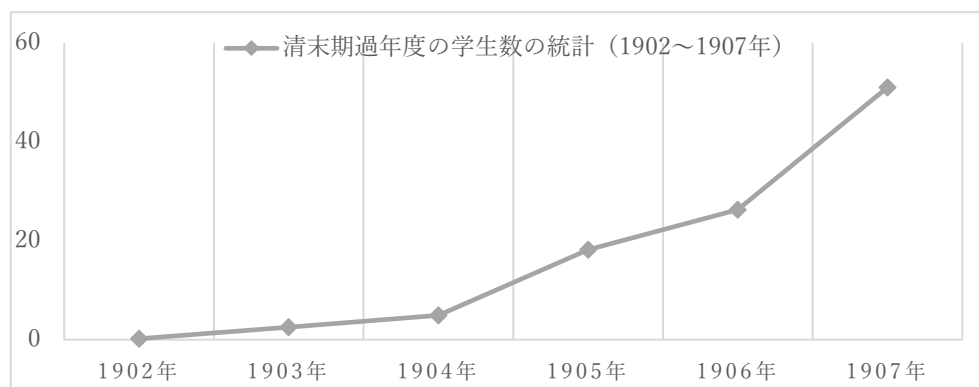


1.2 学校規模の急激な拡大と師範教育の興起

日清戦争後、中国の教育制度も徐々に日本型に移行していった。「富国強兵」を目的に技術学校や外国語学校が整備された洋務運動とは異なり、「全民教育」の形をとっていたと思われる。それゆえ、新式学校の規模も生徒数も急成長していた。図3によると、この時期、全国的に学生数が急激に増加したことがわかる。特に1904年に「奏定

学堂章程」が發布されてからは、制度や政令に支えられ、成長率はさらに高まった。以下の図3は清末期過年度の学生数の増加一覽である（注5）。

図3 清末期の^{ぞうか}学生数の増加



「奏定学堂章程」では、教員需要問題を解決するために師範学校の整備を優先することが明示されている。以下は章程原文の一部を引用する。

学堂必须有师。此时大学堂，高等学堂，省城之普通学堂，犹可聘东西各国教员为师。若各州县小学堂及外府中学堂，安能聘许多之外国教员乎？此时惟有急设各师范学堂，初级师范以教初等小学及高等小学之学生，优级师范以教中学堂之学生及初级师范学堂之师范生。

（学校には教師が必要である。現在、大学堂、高等学堂、省城の普通学堂では、外国人教員を採用することができる。しかし、州や県の小中学校であれば、外国人教員を雇うことは可能なのでしょうか？今は、各級の師範の設立を早めるしかない。初級師範学校は、初等小学校と高等小学校の教員を育成する。優級師範学校は中学堂と初級師範学校の教員を育成する。）（注6）

この章程が發布された後、中国全土で師範学校が急速に増加した。下記の表2（注7）

によると、中国各地の師範学校は、1907年には541校と急成長していた。また、学生数も36,091名となっていた。

表2 1907年中国の師範学堂と師範生統計表

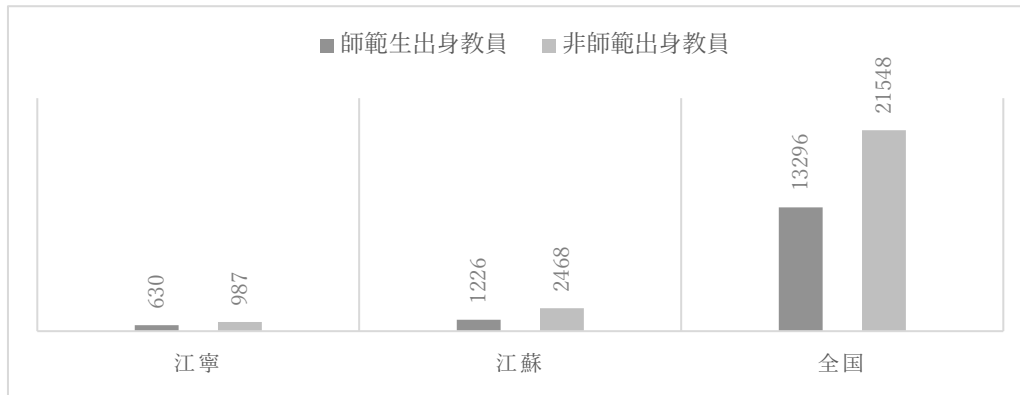
	師範学堂数	師範生数
全国	541 所	36091 人
江寧	13 所	1933 人
江蘇	13 所	1686 人
通州 (南通)	3 所	299 人

師範教育は、教師という人材の需要の高まりとともに、興起してきたのだと思われる。このことは、先に取り上げた「奏定学堂章程」の原文にも反映されている。師範教育が盛んになった理由を知るには、学生数を調べる必要があると思う。そしてこの時期はまだ教育の発展の始まりであるため、筆者は基礎教育、つまり小学校の生徒の規模や人数の調査に着手した方がよいと考えている。以下の表3は、1907年中国の小学堂と小学生統計表である(注8)、図3は1907年小学堂教員資格の比較の一覧である(注9)。

表3 1907年中国の小学堂と小学生統計表

	高等小学堂	兩等小学堂	初等小学堂
江寧	47 所 (2126 人)	72 所 (2733 人)	479 所(10777 人)
江蘇	45 所 (2713 人)	144 所(6959 人)	626 所(18335 人)
全国	1955 所 (84623 人)	2451 所(126191 人)	29199 所(684657 人)
通州	4 所(389 人)	9 所(333 人)	170 所(3726 人)

図4 1907年小学堂教員資格比較



この時期には、小学堂、特に初等小学堂の学校数と生徒数が目覚ましく増加した。表3によると、1907年、全国の初等小学堂の数は29,199校、生徒数は684,657人に達していたことがわかる。基礎教育の普及は師範教育の興起を促進していたとともに、師範教育の発展も基礎教育の質を向上させた。図3から分かるように、中国全土の小学堂教員に占める師範学校卒業生の割合は、1907年には38%に達していた。これも、日本の学校制度から学んだ結果だと筆者は考えている。

(2) 張謇氏の社会的地位と権力

中国は1895年の日清戦争以降、すでに日本から学び始めていた。教育制度の学習、新式学校の創設により、教師に対する需要が高まった。また、教師不足の問題を解決するために、師範学堂の数も急速に増えていた。つまり、近代師範学堂の創設は、張謇氏だけの考えではなく、時代の流れであったと筆者は考えている。しかし、張謇氏が創設した「通師」は、当時としては目立つだけでなく、中国近代史にも強烈な足跡を残したのである。

張謇氏は、この時期に教育改革と日本をモデルとした学校の設立を比較的順調に進

めることができたが、これには強い権力の後押しが必然的に必要だった。それゆえ、張謇氏の権力や先見性を検証することにより、教育改革の形を創造するための外的条件を明らかにすることができると考えられる。

2.1 士紳階級とは

まず、士紳の意味を説明する。地方自治に言及する場合、「郷紳」という言葉もよく出てくる。馮艶春(2017)は、「郷紳」の「郷」は、「郷村」の意味を指す以外、「故郷」「郷里」という意味もあると説明している。地方自治の中心人物は郷紳であると多くの先行研究では指摘している。しかし、筆者はこの論点は間違っているという反対論を打ち出す。特に、清朝末期の社会の激動的な変化の中で、士紳階級は郷村や故郷にとどまらず、都市にも出現していたと思われる。

王先明(2019)は、「郷紳」という言い方は厳密ではなく、地方の有力者を指す場合は「紳董」、つまり紳士や董事を指すべきだと考えられる、という。清朝末期、社会が混乱していた頃、清朝政府は統治を強化するために、さまざまな「局」を設置した。そして、「局」の管理者は、その地方の郷紳階級であることが多かった。この「局」の管理者郷紳だけが、「紳董」と呼ばれることができ、地方を治める権限を持っていたのである(注10)。

楊宇勃(2017)は、士紳階級の特権は国家に由来し、士紳は国家から与えられた特権によって郷村社会に深く根ざしている、という。

本発表では、先行研究の諸説を踏まえながら、清朝末期という特殊な社会的背景を考慮した上で、士紳階級とは、社会的威信や地位の高い地域エリートのこと、官職に就いている人に限定されるものではないと考えている。

2.2 権力の源

清末期における張謇氏の権力はどこから来たのか。筆者は以下のような調査を行っ

た。

2.1.1 「状元」としての張謇氏

明らかなのは、科挙試験の最上位「状元」という身分に伴う社会的地位の高さである。清朝は法律上、科挙試験の合格者に特権を与えた。主に次の3点に反映されている。

1、刑事に関する特権。科挙試験の合格者は犯罪行為を犯す場合、まずその功名を剥奪し、平民に降格させる。そして一平民として処罰する、つまり、犯罪したのは功名者ではなく、平民なのである。このほか、当時は「吏卒骂举人比照骂六品以下长官律杖七十」（役人が举人を罵るには、六品以下の官員を罵る場合と同じ鞭打ち 70 回の刑に処する）という規定もあった（注11）。

2、労働と徭役に関する特権。当時の法律では、科挙試験の最下級合格者である秀才から状元までは徭役作業を免除されることになっていた。このほか、第二級合格者举人から始め、官員候補になっていた。

3、経済の特権。徭役が免除されるだけでなく、功名に応じて経済的な手当も支給されていた。

この3つの特権、特に一番目の刑法に関する特権は、法律的な意味で科挙試験の合格者の社会的地位を高めるものであった。「状元」としての張謇氏は、これらの特権に加え、「翰林院修撰」の6品官職が与えられ、士紳と官員を兼ねた「官紳」となった。それゆえ、彼の地位は南通の一般官吏と士紳より、ずっと高いと筆者は考えている。

2.1.2 政府有力者との密接な関係

張謇氏の権力の源について、単に官員になって士紳階級に踏み込んだだけで説明しきれない部分がある。

張謇氏の幼少期は、中国古代から儒学を学んできた何百万人もの読書人たちと何ら

変わりなく、日々勉強に集中し、一步一步前進し、科挙試験を受け、功名を身につけ、士大夫の階級の一員になる目標を目指していた。16歳の際、張謇氏は科挙試験の最初級に合格し、秀才の功名を身につけることで平民の身分から抜け出すことができた。だが、家族はまだ苦境にあった。

張謇氏の先祖は3代にわたって科挙試験に合格した者がいなかったため、数倍もの受験料が必要だった。そこで張謇氏は、通州如皋県の張駒と交渉し、張駒の孫の名で試験を受けることにした。その後、張駒はこれを理由に何度も金銭を要求し、張謇氏を裁判までにかけて、訴訟は数年にも及んだ。張謇氏は大きな苦しみを味わった。結局、この事件は和解し、張謇氏は学籍を維持することができたが、彼の家族の状況はますます厳しくなった。張謇氏は27歳までの5回の郷試（科挙試験の第二段階、合格者は官員候補になった）にすべて不合格となり、この事件が影響したのではないかと考えられる。

家族の苦境を和らげるため、張謇氏は20歳で孫雲錦氏（元・通州の知州）の下で働き始め、1876年に呉長慶氏（清国軍隊“慶字営”の長官）に招かれて軍隊の幕僚となり、8年間ぐらゐの軍隊生活を送った。

1882年、朝鮮で「壬午軍乱」（注12）が起こり、朝鮮政府は清朝政権に援護を求めた。張謇氏は呉昌慶氏の軍隊に従い、朝鮮に渡り、反乱を鎮圧することになった。張謇氏は朝鮮滞在中、呉昌慶氏への助言役で、「壬午軍乱」の解決にも大きく寄与したと思われる。しかし、清朝政権の内部における派閥の抗争のため、呉長慶氏は李鴻章氏（注13）に攻撃され、2年後に病死した。張謇も幕僚生活を終え、南通に戻った。

この間、張謇は「主戦不主和（講和ではなく戦うと主張する）」という清国政府の外交政策に対する考え方から、当時の清国政府の主要な権力集団である「清流」（注14）のリーダーである翁同龢氏（注15）に気に入られるようになった。その後、張謇は「清派」の重要な一員になった。

その後、翁同龢氏の指導と張謇の自力で、1894年、何度かの会試（科挙試験の第三

級、合格者は「進士」の功名を身につけ、官員になった)に失敗した後、ようやく会試の10位となり、最終試験「殿試」(会試の上位10名が参加でき、試験官は清朝皇帝である)に臨むことができた。結局、張謇氏は最上位「状元」の功名を身につけ、官員の仲間入りを実現することができた。

しかし、残念ながらわずか4年後、再び清朝政権の内部の権力闘争により、翁同龢氏は退任し、故郷に戻ることになった。張謇は権力闘争を見抜き、南通に帰って独自の産業革命、教育改革に乗り出した。

張謇氏が新式学校を建設し、教育改革を進めていた際、すでに彼は官職を辞して実業界に身を置いていた頃であり、張謇氏が南通地区の支配者でもあった。一連の改革ができたのは彼の士紳身分の影響に加え、当時の権力者たちからの支持とも切り離せないと思われる。実際、張謇氏が資本主義的な大生糸工場を設立した際、「清流」と「洋務」の身分を併せ持つ権臣である張之洞氏が「总理通海一带商务」(注16)を委任したという名目だった。このことから、張謇氏本人はもう官員ではないものの、政府とのつながりが薄れたわけではないことがわかる、この特徴は、民国時代にも続いていた。

張謇氏の教育改革に対する政府の態度は、1902年、当時の两江総督である劉坤一氏の言葉から窺える。1902年、張謇氏は「通師」の創設を求めるために、劉坤一に「通海請立師範学校公呈」を提出した。そして、劉坤一氏は張謇氏に宛てた承認書の中で、民間の士紳が私立学校を創設するようお願いすることを表明した。以下、原文の一部を引用する(注17)。

兴贤育才，首重师范，在官费拙，造就未宏，全赖贤绅士就地筹设，辅官立之不及，冀推行之渐广也。

(人材育成のために最も重要なのは、師範教育である。政府は今資金不足により、師範教育の展開が進まない。賢人や士紳に頼って、現地で学校を計画・建設し、師範教育の徐々に普及させたいと希望している。)

清朝末期、清国は多くの対外戦争に敗れ、国家主権が徐々に失われていっただけでなく、多額の戦争賠償金という結果を招いた。その結果、政府も資金不足に直面した。民間人に仕事を任せることになる原因が、これは相手方がその地域で高い社会評価を受けているだけでなく、政府資金の圧迫をある程度緩和するためでもある。それゆえ、張謇氏のような大物実業家と手を組めば、政治的な支持も得られる。つまり、張謇と政府当局との緊密な関係は、張謇自身の努力だけでなく、お互いのニーズが合致した結果であったとも言えると筆者は考えている。

清朝末期、張謇氏は「状元」の身分をもって士紳階級の上級社会に入った。当時の権臣たちから強い支持を受けていた。この2点が、彼の権力の源となったと筆者は見ている。これらの権力の源は、いずれも封建制度の支えと切り離せないことも明らかである。

戊戌変法が失敗すると、張謇氏は官職を辞して故郷に帰り、政治から離れ、実業と教育に全力を注ぐようになった。彼は、教育や実業の成果によって、落ち目の中国を救おうとしたが、政治に関わらないようにしても、その改革構想は政治に付随したもので、あらゆる面で清国政府の制度による制約を受けざるを得なかったとさえ言える。張謇氏は産業革命・教育改革活動において「通官商之郵」、政商の郵便代理人としての役を演じていた(注18)、と章開沅が評価した通りである。

2.3 清朝末期の中央集権的な権力の弱体化と地方自治

清朝末期、中国政府は西欧列強の侵略だけでなく、各地で反乱にも直面した。1851年に勃発した「太平天国の乱」(注19)において、鎮圧に成功したものの、清朝の支配者には大きな打撃を与え、封建制度の崩壊を加速させることになった。1900年の義和団の乱で清国は欧米列強に宣戦布告を迫られたが、これが列強の報復を招き、八國聯軍は北京に侵攻し、清国と不平等条約である「辛丑条約」まで調印させられた。この

一連の民衆の抵抗運動の中で、清国政府の地方に対する権力はさらに弱まり、中央集権的な権力は次第に解体されていった。

2.3.1 『東南互保』事件と中央集権的な権力の弱体化

『東南互保』とは義和団の乱の間に、東南の各省が中央政府の命令に背いて、外国との開戦を拒否した事件のことを指す。義和団の乱の際、清朝の支配層は外交政策において深く分裂していた。慈禧皇太后を中心とする保守勢力は、自らの支配を維持する手段として、義和団の乱を西欧帝国主義に譲渡することを提唱した。そのため、列強に宣戦布告した。しかし、東南の各省の地方大臣たちは、この外交政策に公然と異を唱えた。

清朝が各国に宣戦する前から両江総督劉坤一、湖広総督張之洞、両広総督李鴻章、鉄路大臣盛宣懷らは東南各省を平穏に保ち、列強に侵略の口実を与えないようにすることを協議していた。清朝が11ヶ国に宣戦した後、劉坤一、張之洞、李鴻章、閩浙総督許应騫、四川総督奎俊、山東巡撫袁世凱は参戦国と協議を行い、列国の利権を保護した（注20）。『東南互保』は、清朝末期に各地の漢民族の官吏有力者が初めて公然と朝廷に反抗した典型的な出来事であった。互保運動が起こった後、東南の地方大臣たちはこれを外敵に対する良い武器として使い、列強の上陸を食い止め、東南の地域の安定を維持した（注21）。

東南の各省が清国中央政府の命令に公然と反抗し、その余波で責任は問われなかった。筆者は、「東南互保」事件が清国中央政府の中央集権的な力を大きく弱め、地方の力の拡大を許し、清国末期の地方自治の確立を促進したと考えている。

2.3.2 教育自治と張謇氏

地方自治は古来より存在したが、清朝末期、中央集権が徐々に崩壊していく中で、地方自治の範囲はさらに拡大した。特に、地方自治の中心となっていた教育分野では、

その傾向がより顕著となった。

1906年、清朝中央政府は「教育会章程」を發布し、「補助教育行政，图教育之普及」（教育の普及を実現するために、教育行政を助成する）と明言していた。

この章程では、教育会の成立と運営の際に、士紳階級に頼る必要があることを明記していた。以下の表4は1906年「教育会章程」の内容のまとめである（注22）。

表4 1906年「教育会章程」の簡略

発起人	教育会の発起は、教育界で名望がある人たちと士紳階級の責任である。
分級	省都が総会、地方が分会。分会は総会に所属しない。
会員	普通会员：人柄がよく、教育関係の仕事に就きたいと考えている人。 名誉会員：人格、学問ともに優れている人。あるいは教育会を後援するために資金を提供する方
会務	1、教育研究会を設立する。 2、師範伝習所を設立する。 3、所在地の官立・私立学校に関するあらゆる事柄を監督・調査する。 4、教育統計の報告を作る。 5、各地の興学方法を参考にし、現地に合うように工夫する。 6、民衆の心を正すために、聖人の言葉を教授する。 7、学界のために図書館等の設立を準備する。

この章程では地方自治については触れていないが、その実際の内容、特に会務の第3条で述べられている監督権に関することをみれば、この時期、中央集権体制が徐々に崩壊していく中で、少なくとも教育の分野では地方教育自治が進展していたことが窺える。

1908年、清政府は「城鎮郷自治章程」を公布し、学務は地方自治の下にあることを

明示した。そして、1910年に公布された「地方学務章程」では、教育自治において具体的な事柄について詳細に定められていた。

以上のことより、この時期、教育自治は、法律で正式に確立されていたと筆者は考えている。

「教育会章程」の公布後、中国全土で地方教育自治を推進するための各レベルの教育協会が設立され始めた。江蘇省と南通市でも、江蘇省教育総会、南通市教育会などが省レベル、市レベルの教育協会相次いで設立された。

実は張謇氏は、1905年の時点で、当時の江蘇省各界の士紳たちとともに江蘇学務総会を設立して会長となり、教育の振興、学校の開設、教育研究発表の発表などを行っていた。1906年、「教育会章程」が発行された後、江蘇省教育総会に改組された。そこから張謇氏の教育改革者としての先見性が見られる。

江蘇省教育総会の会長に就任した張謇氏は、江蘇省教育総会の名で清国政府に教育理念や教育改革の具体的な提案を次々と出し、自らの教育事業を推進し、「教育による国を救う論」の理念を実現することを目指していた。清朝末期の地方自治の背景において、張謇氏の士紳階級としての権力はさらに強化され、各種の地方自治組織は彼に一定の政治的資本を提供したと筆者は考えている。これが、南通地区の教育改革を成功させた大きな理由の一つである。

2.3.2.1 地域エリートとしての張謇氏

南通に戻った張謇氏は、南通の地方自治に取り組み始めた。「張謇氏にとって地方自治は、政界や官界を自由に出入りするための政治的遺産であった（注23）」。そのため、張謇氏は南通を実験場として、後半生にわたって地方自治の実現に力が注がれた。教育だけでなく、実業、慈善、医療などの分野でも、張謇氏は南通で大きな成功を収め、南通地域では急速に近代化が進んだ。

上記の地方自治に関する章程や政令における共通点は、地方自治の具体的な実施者

が、士紳階級という地域エリートであることを明記したことである。南通や江蘇省で著名な士紳であった張謇氏は、その教育改革活動において、自治組織の管理者やリーダーでもあり、政府の支援を受け、教育を中心とした一連の地方自治活動を行い、大きな成果を上げた。

表5 張謇氏の地方自治の実績(注24)

1904	学校公立植物園、通海五属学務所、新育嬰堂、翰墨林印書局（出版社）などが相次いで創設された。
1905	南通博物苑、呉淞商船学校を創設した。
1906	南通五属学校、鉄道学校、法政講習所、中国図書公司を設立し、復旦公学の設立に協力。寧属学務会長と蘇属鉄路公司協理に就任した。
1909	江寧商業高等学校監督、江蘇省教育總會会長を務めた。
1910	江寧南洋勸業博覧会を準備し、勸業研究会を設立した。

注目すべき点は、張謇氏の教育改革を行う権力が、清国政府との密接な関係に基づくものであったことである。このように張謇氏自身、一度は政治から距離を置こうと思ったが、実際、初期の幕僚時代から、「状元」称号を受けた短い官員生活においても、教育改革や地方自治の際に推進した共和議会制度においても、常に清国政府と良好な関係を保っており、政治とは切っても切り離せない存在であった。

注

1、清朝時代、政府は海上貿易を厳しく管理し、乾隆時代には広州一港だけが開港する。政府は海上貿易を独自運営し、民間の海上貿易を禁止した。

2、郭秉文『中国教育制度沿革史』 福建教育出版社 2007年

- 3、阿部洋『中国の近代教育と明治日本』 p34 福村出版 1990 年
筆者は明治期の各種学制令を参考にして訂正し、この表を作成した。
- 4、(阿部洋『中国の近代教育と明治日本』、福村出版、1990 年、 p34 と朱有瓛『中国近代学制史料』、1983 年と清国学部總務司編『学部第一次教育統計図表』、1907 年)を参考に作成した。
- 5、清国学部總務司編 「暦年学生人数比較図」『学部第一次教育統計図表』、1907 年、 p9。1907 年のデータは、1902 年から 1906 年のデータがない直隶、四川、広東三省を除いたものである。
- 6、張之洞『奏定學堂章程・学務綱要』 1904 年
- 7、清国学部總務司編『学部第一次教育統計図表』、1907 年を参考に作成した。
- 8、清国学部總務司編『学部第一次教育統計図表』、1907 年を参考に作成した。初等と高等の両方を持つ小学堂は、両等小学堂と呼ばれる。
- 9、清国学部總務司編『学部第一次教育統計図表』、1907 年を参考に作成した。
- 10、王先明「紳董与晚清基层社会治理机制的历史变动」 『中国社会科学』 pp. 185-203+208 所載 2019 年 6 月
- 11、大清律例館編『大清律例汇编便览』 29 卷 p2 1903 年
- 12、1882 年 (明治 15 年、壬午の年)、朝鮮のソウルで起こった政変。
- 13、李鴻章 (1823 年 2 月 15 日 1901 年 11 月 7 日) は、中国清代の政治家。字は少荃。洋務運動を推進し、清後期の外交を担い、清朝の建て直しに尽力した。日清戦争の講和条約である下関条約で清側の欽差大臣 (全権大使) として調印を行った。
- 14、清末の政治集団で、光緒帝のもとで、皇太后のもとでの保守派と対立する重要な政治勢力であった。
- 15、翁同龢 (1830 年—1904 年) は、清末の政治家・書家。1894 年の日清戦争では主戦論を唱えていた。光緒帝の親政と共に李鴻藻と並ぶ派閥 (帝党) の領袖となり、西太后・李鴻章ら后党と対立していた。

- 16、張之洞『張之洞全集』 1989年
- 17、劉坤一「兩江總部堂劉坤一批」 『通州師範三十周年記念刊』 p3 所載 1902年
- 18、章開沅『張謇伝』 p226 浙江古籍出版社 2021年
- 19、1851年に清で起こった大規模な反乱である。洪秀全を天王とし、キリスト教の信仰を紐帯とした組織太平天国によって起きたものである。「長髮賊の乱」とも呼ばれる。
- 20、叶志如「清末学政学务章程史料」 『历史档案』 1989(02):52-60+41. p 53 「付：教育会章程清单」によって作成した。
- 21、木村靖二・岸本美緒・小松久男『詳説世界史研究』 p 417 山川出版社 2017年
- 22、郭继武「东南互保与晚清政局」 p24 中央民族大学 2010年
- 23、周新国と張慎欣『張謇辞典』 p224 広陵書社 2021年
- 24、章開沅『張謇伝』 p210-211 浙江古籍出版社 2021年を参考に作成した。

第2 通州師範学校の日本留学の学生の考察

本章では、3つの節に分け、中国の最初の師範学校3校のうちの張謇氏が設立した私立の通州民立師範学校にしぼり、留学生の派遣の原因と背景、日本留学生の活動を調査し、「通師」の日本留学生が果たした歴史的役割と私立学校としての「通師」の独自の発展モデルを明らかにすることを旨とする。第1節では「通師」が留学生の派遣の原因を考察し、なぜ他の国ではなく日本に留学生が送られるようになったのか、その疑問点を中心に調査する。第2節では、「通師」の留学生の活動を考察し、当時の日本留学の学生の実態を明らかにする。第3節では、南通地域の教育近代化における「通師」の日本留学経験者の役割や彼らの歴史的な貢献を考察する。

筆者の主張は①留学生の派遣は、張謇氏の教育改革活動と密接に結びついていた。「通師」の教員を充実させただけでなく、南通地区の教育制度と教育産業の管理の面で急速な発展に寄与し、南通地区の教育の近代化に大きく貢献していた。②「通師」の留学生の派遣、派遣学生と派遣先の学校の選定において、資金不足などの背景があった。3回にわたる日本への留学生派遣は、張謇氏の教育改革の展開に応えるものであり、張謇氏と「通師」もこれらの留学生を助けるために全力を尽くした。③「通師」のような中国最初の師範系の私立学校は、公立学校と比較して、資金不足に常に悩まされていたが、「通師」は近代中国において、多くの公立学校よりもはるかに優れた師範教育のモデルとして注目されていた。

上記に挙げた筆者の三つの主張について、各節で説明する。

(1) 留学生の派遣の背景

中国では、1896年盛宣懷氏が設立した南洋公学師範院、1902年清朝政府が設立した京師大学堂師範館、1902年張謇氏が設立した通州民立師範学校が、中国の最初の師範学校であり、師範教育の3つの源とも言える。

南洋公学師範院は大官僚である盛宣懷氏が経営した公立大学、京師大学堂師範館は

清朝中央政府が経営した国立大学、張謇氏の創設した通州師範学校(通師)は中国初の民間資本による経営の私立学校であった。それゆえ、私立学校としての「通師」は独自の発展モデルがあったと筆者は考えている。

張謇氏は、「外材」(外国人人材)を積極的に採用しただけでなく、「内材」(中国人人材)の育成をも重要視していた。『通州師範学校職員表・学生録 宣統三年』(注1)では、「通師」は1904年～1907年の間、学生14名を日本に派遣し、留学させていた。下表は、日本に留学した「通師」の学生一覧である(注2)。

表6 留日の通州師範学校の学生一覧

名前	出身地	クラス	留学学校	留学時間
曹文麟	通州	第一次本科	日本大学高等師範部(注3)	1904.3～1908
趙邦容	如皋	第一次本科	東洋大学師範科(注4)	1904.3～1910
王福基	如皋	第一次講習科	宏文学院速成師範科	1904.3～1905.1
李元蘅	通州	第一次講習科	宏文学院速成師範科	1904.3～1905.1
樊璞	海門	第一次講習科	宏文学院速成師範科	1904.3～1905.1
繆文功	东台	第二次本科	宏文学院速成師範科	1904.3～1905.1
陶駟原	东台	第二次本科	日本体育会体操学校(注5)	1905～1906
黄家瑞	如皋	第二次本科	日本体育会体操学校	1905～1906
泰汝礪	通州	第二次本科	宏文学院速成師範科	1905～1906
李长基	太仓	第二次本科	宏文学院速成師範科	1905～1906
杨安仁	通州	第二次本科	宏文学院速成師範科	1905～1906
熊輔龍	武进	第二次本科	千葉医学専門学校(注6)	1905～1911.9
于忱	通州	第一次本科	早稲田大学清国留学生部師範本科博物学科(注7)	1907.2 ～ 1909.12

尤慎铭	通州	第一次本科	早稲田大学清国留学生部師 範本科博物学科	1907.2 ～ 1909.12
-----	----	-------	-------------------------	------------------------

1.1 留学生派遣の原因の検証

1.1.1 「違法」の形で働いていた日本人教習

1903年清国政府が公布した『奏定学堂章程』には、師範学堂の教習の招聘について、次のような規定があった(注8)。

省城师范学堂，或聘外国人为教员、或辅以曾学外国师范毕业之师范生。外府师范学堂则只可聘在中国学成之师范生为教员……

(省城の師範学堂は、外国人を招聘して教員となし、あるいは嘗て外国の師範学校で学んで卒業した師範生を充てる。一方、外の府にある師範学堂は、国内の師範学堂の卒業生しか採用できない。)

清朝末期における近代師範学堂は、教習不足に悩まされた。特に、自然科学分野の教師が不足していた。上記の規定では、師範学堂の教員招聘について、外国人教習および外国の高等教育機関を卒業した中国人を雇用できるのは、省城に設立された師範学堂のみとされている。

「通師」の設立当初は、教師不足の問題を解決するために、まずは、東京物理学校を卒業した王国維氏や東京高等師範学校を卒業した陳師曾氏など、日本の高等学校に留学した中国人を採用し、さらに日本人8名を次々と教習として採用した。

しかし、当時の通州は、江蘇省の管轄下の直轄州で、江蘇省の省政府の所在地ではないため、通州の小学校の教員育成を中心とした私立の初級師範学堂である「通師」は、外国人や留学帰りの中国人を教習として直接採用することは法律上禁じられていた。また、この8名の「通師」の日本人教習については、日本外務省が公布したこの

時期の中国での日本人教習に関する公文書である「清国傭聘本邦人名表」(注 9)にも記録されていなかった。それゆえ、この 8 名の日本人教習は「違法」の形で「通師」で働いていたと筆者は考えている。

これらの日本人教習と清国法律では認められていない「通師」との間の唯一のつながりは、張謇氏の抜群の力で個人的なルートであった。張謇氏は違法責任を問われることを顧みず、信頼できる優秀な人材を育成することが急務と認識していたことが考えられる。

1.1.2 私立学校として「通師」の資金不足

「通師」は、中国最初の民間資本が運営する私立師範学校であるため、当時続々と建設された公立学堂と比べれば、資金面では不利だったことは当然である。特に教職員の給与水準は、政府が運営する公立学堂とは比較にはならないほど低かった。下の表 7 は、江蘇省政府が運営していた官立師範学校である两江師範学堂の 1907 年の支出予算(注 10)、図 5 は「通師」1902～1911 年職員給料の支出変化一覧である(注 11)。

表 7 1907 年度两江師範学堂本部支出予算一覧

単位：龍洋（元）

支出項目	人数	支出数	百分比
職員給料	10	14784	9.52
中国教習給料	26	30840	19.85
日本教習給料	13	36900	23.75
書記給料	15	2160	1.39
夫役食料費	101	6852	4.41
教職員食料費	64	2304	1.48

学生食料費	600	21600	13.91
図書標本計器			
行政設備及雑用		39912	25.69
小計		155352	100

図5 通州師範学校 1902～1911年職員給料の支出変化一覧

単位：龍洋（元）

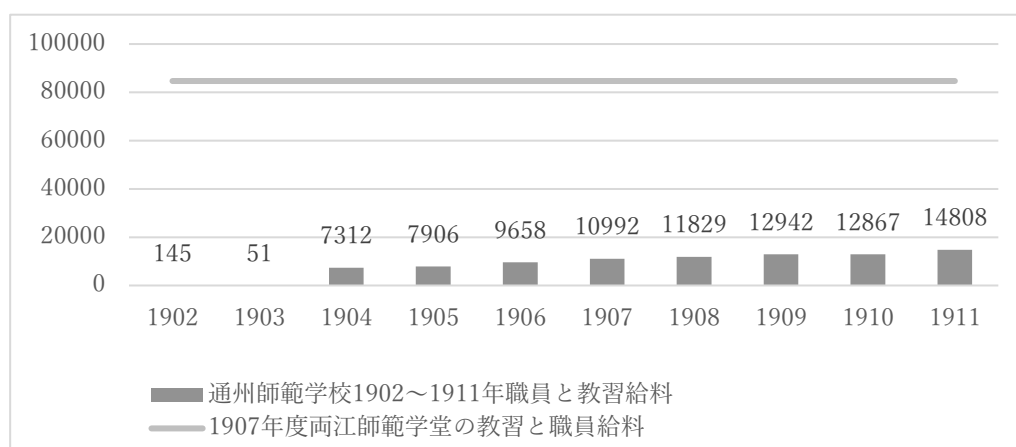


図5で分かるように、この時期の通州師範学校の教職員の給与の支出は、年々増加しているものの、常に官立学校の両江師範学堂の20%以下であった。表2のデータから計算すると、両江師範学堂の日本人教習の平均給与は月236元、中国人教習の平均給与は月98元であった。

一方、この時期、「通師」の中国人教習の最高位である王国維氏の月給はわずか70元、日本人教習の西谷は100元、木村は120元で、後に150元に引き上げられたが、それでも両江師範学堂の平均水準には達していなかった。

当時は、全国各地で新式学堂が續々と設立され、教習が極端に不足している時期でもあった。教習を誘致するために高い給料を出すのはごく普通で、私立学校としての「通師」はその中で不利な立場にあったと考えられる。それゆえ、「通師」では、教習

が赴任した後すぐに辞めてしまったというケースがよくあった。例えば、南洋公学出身の祝君舜は英語教習として教えていたが、わずか5カ月で退職してしまった。楽歌教習である夏清貽は2カ月しか在職しなかった(注12)。

この背景もあり、張謇氏と「通師」は、自前の教員を養成し、確保することが最優先の課題となった。実際、数年の発展を経て、「通師」の教職員の大半は同校の卒業生、一部は海外留学組の卒業生であった。

1.1.3 日本語が堪能な人材の需要

当時の「通師」の日本人教習は中国語を知らないため、授業中の通訳として日本語が堪能な人が必要であった。さらに、この時期、師範学堂で使われていた教科書はほとんど日本から導入されたものであった。「通師」では、プロの通訳を追加で雇う余裕がなかったため、日本に留学していた中国人教師が通訳を兼任していた。しかし、それらの中国人教師は少ない上に、自分の授業も担当していたから、日本人教習全員の授業の通訳はとても無理だった。一部の日本人教習の授業は、通訳なしで行われていたと見られる。

この問題を解決するため、「通師」では、日本語の読み書きを師範本科の必修科目とし、日本語を教えることができる人材を求めた。『通州師範学校学課章程』(注13)により、師範本科の1週間の授業は36時間で、日本語課程に割り当てられた時間は、学年によって9時間、3時間、4時間となっていた。この授業時間は中国国文をも上回るほどであった。「通師」では日本語を教える教習も多く、日本へ学生を派遣したことから日本語が堪能な人材を育成するという考慮があったと筆者は考えている。

2.2 留学生の派遣の経費

具体的な支出については、「通師十年度支略」(注14)により、「通師」が1905年、1907年、1908年、1909年に、それぞれ1004元、400元、1120元、760元を日本に留

学した学生への補助金として支出した。1904年から1906年までの日本滞在中の公費留学生は10人で、いずれも1年間の速成教育コースであったため、1人当たりの年間平均補助額は約100元、1907年から1909年までの間は3人留学、1人当たりの年間平均補助額は約253元であった。この4年の「通師」の支出総額は107,392元、そのうち留日学生への補助額は3,284元で、約3.05%であった。注目すべき点は、「通師十年度支略」に掲載されている「通師」の支出額には、通州附属小学校、南通博物館、南通農学校の支出も含まれているため、実際には、留日学生への補助金支出の割合はもっと高くなるはずである。

2.3 留学機関について

1904年から1907年にかけて、「通師」は3回にわたって学生や教師を日本に派遣した。このうち、曹文麟氏と趙邦容氏は自費で留学し、他の12人は学校の公費で日本に留学した。以下の表3は「通師」の留日学生の留学機関と資金源の一覧である(注15)。

表8 留学機関の性質と資金源の一覧

時間	学校名	資金	人数	学校性質
1904	日本大学高等師範部	自費	1	高等教育
	東洋大学師範科	自費	1	高等教育
	宏文学院速成師範科	公費	3	速成教育機関
1905	宏文学院速成師範科	公	4	速成教育機関
	日本体育会体操学校		2	各種学校
	千葉医学専門学校	費	1	専門学校
1907	早稲田大学清国留学生部師範本科博物学科	公費	2	留学生教育機関

自費留学生2名のほか、残りの公費留学生12名のうち7名が宏文学院速成師範科、2名が早稲田大学清国留学生部師範本科博物学科、2名が日本体育会体操学校、1名が千葉医学専門学校で留学していた。

具体的には、自費で来日した2人は、ともに清華補習学校で1年間の日本語・進学コースに通った後、高等教育機関へ入学した。公費留学生の中の医学留学生であった熊輔龍もそうだった。

清華補習学校は東京都小石川区にあった実業補習学校、運営者は范源濂と梁啓超である。この学校は、当時の清国在日公館が資金を提供し、来日した中国人留学生の理工科の高等教育機関への進学を支援するために、日本語の授業と予備教育が行われた。当時、日本の高等教育機関への進学を目的に来日した多くの中国人留学生が、まずこの学校で勉強するようになった。このモデルは、現在の日本語学校に入学して、日本の大学・大学院や専門学校に進学するという形態に非常に近いものと筆者は考えている。

このような留学モデルは、資金などの外的条件が整ってこそ、より良い人材を生み出すことができると筆者は考えている。しかし、張謇氏と「通師」側は、このような派遣留学をモデルとする余裕がないことは明らかであった。「通師」は、資金不足と教員不足の二重苦の中で、日本型教育人材を早く養成し、日本の教育制度を南通に導入するために、学生を日本に派遣して、速成教育に踏み切らざるを得なかったのだと筆者は見ている。

当時、日本には東洋大学日清高等教育部(注16)、法政大学法政速成科(注17)など、日本に来る中国人留学生のために速成教育を行う機関が多くあった。「通師」の生徒の多くが宏文学院を選んだのは、師範速成教育を行う教育機関が少なかったことに加え、張謇氏が宏文学院創設者の嘉納治五郎氏と個人的に親交があったからだと筆者は考えている。

宏文学院は、明治時代清国からの留学生のために、著名な教育家である嘉納治五郎

氏が日本に創立した教育機関である。修学コースは普通科と速成科があり、普通科は原則3年で修了するが、実際には最長でも2年10ヶ月しかなく、多くは1年程度で卒業する。速成師範科の期間はさらに短く、6ヶ月から11ヶ月がほとんどである。1907年以降、速成科は廃止された。当時、外国人留学生のための教育機関としては、間違いなく日本最大規模であった。

当時、嘉納治五郎氏は東京高等師範学校の校長も務めていた。それゆえ、多くの東京高等師範学校の教師が同時に宏文学院で教師を務めていた。また、多くの大学教授も宏文学院の講師を兼任していた。宏文学院は速成教育機関であったが、教員陣は非常に豪華であった。

1903年、張謇氏は日本を訪れた際、嘉納治五郎氏と出会い、日本の学校を訪問して調査する目的で嘉納氏と交流した。その後、張謇氏は嘉納氏の案内で東京高等師範学校を訪問した。帰国してからも張謇氏と嘉納氏との手紙のやりとりがずっと続いた。

「通師」の14名の日本留学生のうち、7人が宏文学院に留学したが、これは張謇氏と嘉納治五郎氏の個人的な親交の結果でもあった。

(2) 「通師」の日本留学の学生の調査

本節では「通師」の日本留学の学生に関する調査について報告する。

2.1 曹文麟

曹文麟、字は勛閣、号は君覚。1879年、江蘇省通州生まれ、幼少の頃より家訓を受け、秀才の功名を身につけた。1900年、上海の広学会格致書院に就学した。1903年、「通師」の師範本科一期生として入学した。1904年、日本へ留学し、9月清華学校で日本語を勉強した。1906年、日本大学高等師範部に進学した。1908年、学業を断念し、中国に帰国した。

帰国後、張謇氏、孫宝書らとともに、通海五属公立中学校(現・江蘇省南通中学)の

設立に携わっていた。中学校開校後は、学監に任命され、国文と倫理の教習も兼任した。1915年、江蘇省代用師範学校(1912年から通州師範学校という学校名に変更)の国文教習となり、南通県教育会の副会長と執行委員を務めたこともある。

1938年、日中戦争で南通が陥落し、「通師」の建物がすべて破壊された。曹文麟は通州師範海復僑校(注18)に赴き、教育現場でがんばり、若い学生たちが革命運動に加わることをも支援した。1951年、病気のため死去した。

2.2 黄家瑞

黄家瑞、字は辑五、号は七五。1882年、江蘇省通州如皋県(現・江蘇省南通市如皋市)生まれ、1902年に科挙試験で秀才の功名を身につけた。1904年に「通師」師範本科二期生として入学した。1905年、日本へ渡って、日本体育会体操学校で留学した。同年、孫文氏の紹介より、中国同盟会に参加することになった。1906年7月、黄家瑞は中国同盟会主催の章太炎氏(注19)来日歓迎会に出席した。年末に中国に帰国し、如皋師範学校の体育教習になった。

武昌蜂起が始まると、いち早く辛亥革命に応え、如皋軍政を組織し、清朝滅亡の一助を担った。1947年、中国共産党に入党した。中華人民共和国建国後、蘇北図書館館長、蘇北博物館館長、江蘇省文化歴史研究院副院長などを歴任した。1964年4月20日、長い闘病生活の末、南京で死去した。

また氏は書道が上手、書道家といっても過言ではない。江蘇省書道印章研究会(現・江蘇省書道協会)副会長を歴任。現在も南通市や如皋市などでは、彼の手書きの扁額などが残っている。

2.3 于忱

于忱、字敬之。1877年、江蘇省通州騎岸県生まれ。1903年、「通師」師範本科一期生として入学した。1906年5月、卒業した後、彼は張謇氏に招かれ、学校に残って働

くことになった。1907年、尤金緘とともに、「通師」から公費で日本に派遣され、早稲田大学清国留学生部師範本科博物学科に入学した。1909年12月卒業し、1910年初帰国した。

帰国後、「通師」の齊務長となり、後に齊務主任と改称され、学生管理を担当していた。1911年、通州勸学所の総董を兼任した。1913年以降、張謇氏が長い間不在だったため、于忱が「通師」の校務を取り仕切るようになった。1924年から1927年まで、江蘇省立第七学校(現・江蘇省南通中学)の校長も兼任した。1928年、「通師」校董会書記となった。1930年、張謇氏の息子である張孝若が「通師」の校長になったが、彼は長く上海に住んでいたため、校務は依然として于忱が取り仕切っていた。1935年、張孝若は暗殺され、悲劇的な死を遂げた。その後、于忱氏は「通師」の校長に就任した。

1938年、日中戦争で南通が陥落し、「通師」の建物がすべて破壊された。于忱と顧怡生は、海復鎮通州第二付属小学校(前述の通州師範海復僑校)に学校を移転することにした。1945年、日中戦争が終わった後、于忱氏はまた「通師」を再建するために東奔西走した。1949年、中華人民共和国が成立し、于忱氏は州師範学校の校長を務め続け、1952年、通州師範は公立学校に変更され、于忱氏は引退した。1956年、79歳で亡くなった。

2.4 尤金緘

尤金緘、字は慎銘。1884年、江蘇省通州生まれ、1903年、「通師」師範本科一期生に入学した。1906年5月に卒業した後、彼は張謇氏に招かれ、学校に残って働くことになった。1907年、于忱とともに、「通師」から公費で日本に派遣され、早稲田大学清国留学生部師範本科博物学科に入学した。1909年12月卒業し、1910年初帰国した。帰国後、「通師」の物理・化学の教習となった。1913年からは、「通中」の3、4年生の物理・化学の教習を務めていた。1951年、崇敬中学副校長に就任し、崇敬中学が南通第三中学になった後も、1956年まで副校長として勤務した。72歳で引退し、1963年

79歳で亡くなった。

1938年、日中戦争で南通が陥落し、「通師」の建物がすべて破壊された。尤金緘氏は「通師」の多くの同僚と共に、通州師範海復僑校に行き、教育の仕事が続けていた。

2.5 繆文功

繆文功は東台拼茶鎮（現・江蘇省南通市如東県）の出身であった。1904年1月、「通師」師範本科二期生として入学し、2月には学校から日本の宏文学院速成師範科に派遣され、年末に帰国した。1906年、蔡少蘭らとともに、拼茶啓秀文学会は蔡少蘭を校長とする啓秀二小（現在の拼茶小学）に改組された。そして、「通師」の国文教師、学校監督を歴任した。1913年の末、「通中」の監理・校長に就任した。また、啓秀小学校の校長も務めた。1944年逝去。生前、『小学校訓練法』、『小学校管理法』、『二部教育法』、『中等国文示範』など、多くの著作を残した。

2.6 樊璞

樊璞、字は召循、号は民一、1869年江蘇省通州海門鎮生まれ。清朝末期の貢生で、文学の才能があった。1903年、「通師」の講習科一期生として入学し、学問を修めた。1904年2月、学校から日本の宏文学院速成師範科に派遣され、年末に帰国し、通州学務公所を手本に海門鎮で海門学務公所を設立した。同年10月、海門教育会副会長に就任した。1907年、清朝政府は勸学所章程を公布し、9月には海門同知である梁孝雄に推薦され、海門勸学所の総董に就任することになった。海門の師山書院の建物を利用し、海門に最初の県立小学校を建設し、校長となった。在任中、高等小学3所、初等小学校67所を設立した。

2.7 李元衡

李元衡、字は亦杭。1868年江蘇省通州生まれ。1891年、県学(注20)に入学し、清朝

末期の貢生になった。1903年3月、「通師」講習科一期生として入学した。1904年2月、学校から日本の宏文学院速成師範科に派遣され、1905年末に帰国し、張謇氏の命により、「通師」附属両等小学校(現・江蘇省南通師範專科学校第一附属小学)の建設を策定していた。1906年、小学校が開校し、李元衡が主事を就任し、また、師範学校の教育学教習を兼任した。1907年～1915年の間、通州教育会会長を務めていた。1920年、附属両等小学校の主事を辞め、南通県立師範女子師範学校の校董になった。1922年、張謇氏は農村教育を推進し、垦牧郷(注21)で通州師範学校附属垦牧郷高等小学校を設立した。李元衡は主事になり、垦牧郷の他の学校を指導するために巡回していた。1927年、病気によって退職した。その後、南通の図書館に勤務することになった。1935年から南通老人ホームを主宰していた。1942年、亡くなった。

2.8 王福基

王福基、字は錫五、1860年江蘇省通州如皋県生まれ。幼少の頃、科挙試験で秀才の功名を身につけ、自宅に学館を開設した。1903年3月、「通師」講習科一期生として入学した。1904年2月、学校から日本の宏文学院速成師範科に派遣され、1905年末に帰国し、沙元炳に雇われ、如皋公立高等小学校の主事となり、如皋公立簡易師範学校で国文教師も務めた。中国の著名な言語学者である魏建功の師である。

1909年、沙元炳は如皋乙種商業学校を創設した。王福基は主事に就任した。1914年、副編集長として、『如皋県志』(注22)の編集に加わっていた。1930年、病気によって亡くなった。

2.9 趙邦容

趙邦容、字は彦誠。1872年江蘇省通州如皋県に生まれた。1902年、沙元炳が招聘され、如皋公立簡易師範学校の教習になった。1903年、「通師」師範本科一期生として入学した。1904年、「通師」は日本への留学生を派遣したが、定員割れで落選した。その

後、趙邦容は自費で日本へ留学し、公費留学生とともに勉強した。最初の二年間、清華学校で日本語を勉強していたが、その後、正則中学校(現・東京正則高等学校)の予備課程に入り、英語を勉強しながら、大学の入学試験を準備していた。1906年、帰省のため、一時帰国した。沙元炳氏の依頼で、1年間ほど、如皋公立簡易師範学校で教鞭をとることになった。1907年、学業を続けるために再度日本に赴き、東洋大学教育科に入学した。1910年帰国し、如皋公立簡易師範学校の校監(学校運営の理事長に相当する)になった。その後、呉県中学の校長、江蘇省立第五師範(1927年、数校と合併して江蘇省揚州中学を設立した)の校長を歴任した。1913年、江蘇省教育庁の庁長に推挙されたが、長年の激務のため肺病が再発し、死去した。生前、教育学に関連する多くの日本の書籍や文献を翻訳した。

2.10 熊輔龍

熊輔龍、字は省之。1886年、中国江蘇省武進生まれ。1904年、「通師」師範本科二期生として入学した。1905年、「通師」から日本に派遣され、最初は、清華学校で日本語を勉強した。1906年、千葉医学専門学校(現・千葉大学医学部)に入学した。1909年から、学術雑誌である『医薬学報』(注23)に6本の研究発表を発表した。1911年9月、卒業して帰国した彼は、清国政府の遊学卒業生考選(注24)を受け、優等の成績と認められ、医学举人(注25)という称号を授与された。

1911年末に辛亥革命が起こると、張謇氏はすぐに南通軍政を立ち上げ、熊輔龍を軍医に任命した。1912年、張謇氏は南通医学専門学校(南通大学医学部と蘇州大学医学部の前身)を設立し、熊輔龍がその主任に就任した。同年3月、「通師」の校医をも兼任した。1913年、南通医院(現・南通大学医学部附属病院)の主任に就任した。

1912年、南通で最初の乳癌切除術を行っていた。1915年、南通で初めて人体解剖の示範教育を実施した。同年4月、戒煙丸を開発し、2,000人以上のアヘンの戒めることを支援した。

1916年、彼は南通病院を離れ、2度目の日本留学を果たした。帰国後、張謇氏の資金的支援を受け、病院を開業した。1933年、全国医師連合会第3回大会に鎮江の代表として出席した。1947年4月、「漢奸」(注26)で江蘇省高等法院に指名手配された。

熊輔龍は清末民初における張謇氏が与えた任務を十分に果たし、南通の医療事業の近代化に貢献した。張謇氏も「通人之知西医，盖自此始」(南通の人たちは、熊輔龍が南通病院の院長をしていた頃から、西洋医学が分かるようになったのだ)、と高く評価していた(注27)。

2.11 陶駟原 泰汝礪 李长基 杨安仁

この4人に関する詳細な資料はまだ見当たらない。正確な生没年も不明である。泰汝礪と杨安仁は1914年前、病気によってなくなった。李长基は帰国後、太倉中学堂の教習になった。陶駟原帰国後、「通師」の体育教習として務めていた。最近、発見したが、陶駟原氏は1904年～1907年の間、日本体育会の学術雑誌『體育』(155号、161号、163号)に、発表「體操之訓練的目的及教授上之注意」、記事「通州師範學校模範運動會趣旨書」、体操紹介「蓮華行進(四拍子)」と「新式慕奈利」が掲載されている。これは、通州師範学校の留学生が海外の学術誌に発表された、最も早い発表であった。以下の図6は陶駟原の「體操之訓練的目的及教授上之注意」である(注28)。

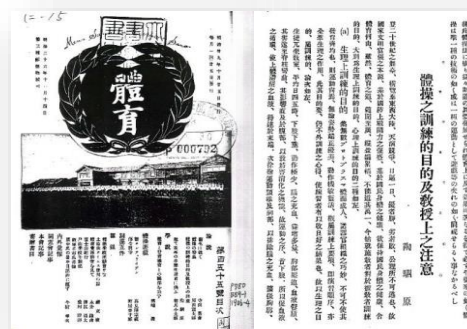


図6 「體育」と「體操之訓練的目的及教授上之注意」

(3) 教育近代化における「通師」の日本留学経験者の役割

本節では教育近代化における「通師」の日本留学経験者の果たした役割について説明する。

1.1 教育現場での日本留学経験者

第1節で取り上げたが、「通師」が日本に留学生を派遣した大きな理由の一つは、信頼できる優秀な日本型教師を養成し、私立学校としての教師不足を解消するためである。そして、これらの日本留学生たち、帰国後に教育現場でその能力を発揮していた。

以下の表8は「通師」の日本留学経験者の勤務先及び学校種類の一覧表である。

表8 「通師」の日本留学経験者の勤務先及び学校種類一覧表

名前	勤務先	職務	学校種類
曹文麟	通海五属公立中学校と通州師範学校	学監と教習	張謇系
趙邦容	如皋公立簡易師範学校と江蘇省立第五師範	教習と校長	公立
王福基	如皋公立簡易師範学校と如皋乙種商業学校	主事と教習	公立
李元衡	通州師範学校附属両等小学校と通州女子師範	主事と教習	張謇系
樊璞	海門学務公所と海門高等小学堂	総董と校長	公立
繆文功	通州師範学校と通海五属公立中学校	教習と監理	張謇系
陶弼原	通州師範学校の体育教習	教習	張謇系
黄家瑞	如皋公立簡易師範学校	教習	公立
泰汝礪			
李長基	蘇州太倉中学堂	教習	公立
楊安仁			
熊輔龍	通州師範学校と南通医学院	校医と院長	張謇系

于忱	通州師範学校	校長と教習	張謇系
尤慎銘	通州師範学校と通州女子師範学校	学級主任と教習	張謇系

上記の 14 名の留日経験者は、中国に帰国後、すぐに教育の現場で活躍していた。彼らが勤務した学校は、主に張謇氏が設立・運営した私立学校、また一部は公立学校であった。14 名の留日経験者は教習としてだけでなく、教育事業の管理者としての役割も担うことが多かった。教える科目も物理・化学、体育、教育法など、「通師」でも不足している科目が多かった。

「通師」の教師不足を解消するために日本に派遣されたが、帰国後の教育現場で活躍されていた 14 人は張謇氏の学校だけでなく、南通全体に広がっていたことがわかる。これも、日本型教育制度を南通に普及させようという張謇氏の決意の表れだと筆者は考えている。

1.2 南通師範校友会と日本留学経験者

南通師範校友会は、日本の東京高等師範学校校友会をモデルとして、1910 年に「通師」の日本人教師西谷虎二の提唱によって通州師範学校の本部で設立された。校友会は、庶務部、学芸部、交際部、通訊機関部で構成されている。1910 年から 1911 年までは「通州師範校友会」と呼ばれたが、1912 年から「南通師範校友会」と改称された。会則には「本会以亲睦同校交谊研求教育进步为目的」(本会は校友の親睦の交流を図り、教育の進歩のために研究することを目的とする)と明記されている(注 29)。校友会が編集・発行した『南通師範校友会雑誌』は、学術誌のような形になっていることから、「南通師範校友会」は、研究会的な性質を持っていると筆者は見ている。

校友会は、日本の東京高等師範学校校友会をモデルとしているため、その運営形態も日本型になっている。その結果、「通師」の日本留学経験者らは、校友会の運営にも重要な役割を果たした。第一期の運営者として、張謇氏本人が自らその会長に就任し

た。残り4つの部門の部長はいずれも日本留学経験者であった。庶務部の部長は繆文功、学芸部の部長は于忱、交際部の部長は李元蘅、通訊機関部の部長は王福基と樊璞であった。このほか、曹文麟、趙邦容、尤慎銘なども校友会の幹事を務めた(注30)。この校友会は、「通師」の日本留学経験者組を中心に運営されていた。

『南通師範校友会雑誌』は、校友会学芸部が編集、印刷、配布を行い、1911年に創刊された。創刊号は、校友会会則の説明のほか、「論説」「教育之実践」「会員報告」「通信」「伝記」「文芸」「雜纂」「兒童之詞藻」などの部分に分かれていた。「論説」と「雜纂」は教育学的な研究発表やレポートが多く、「教教育之実践」は教習らの教育実践や学校経営に関する体験談が中心となっていた。『南通師範校友会雑誌』は1911年から1917年にかけて7号まで発行されたが、この7年間、この日本留学経験者組は、日常の運営・管理を担当する以外に、この研究雑誌に多くの発表や教育実践報告を発表していた。

この組織は、日本の近代的な研究会に類似しており、日本留学経験者の努力によって長年運営され、南通地区の教育の普及と近代化に大きく貢献したと見られる。

注

- 1、『通州師範学校職員表・学生録 宣統三年』p5 翰墨林印書局 1911年
- 2、朱嘉耀「通師早期派送的留学生情况表」 『南通師範学校史 第一卷 記事』所載 pp. 197-198 南京師範大学出版社 2012年

留学時間、学校など誤りがあったため、筆者は訂正した。

- 3、原文では「明治大学師範科」となっているが、当時の明治大学には師範科がなかった。筆者が曹文麟の日記を調べた結果、彼の留学先は日本大学高等師範科であることが判明した。

- 4、哲学館師範科とする説もあるが、趙邦容が入学したのは1907年で、そのころは東洋大学と改称されていた。

5、日本体育会体操学校は、1891年で東京市牛込区に創設された体育会から改称され、1900年に各種学校となり、本科1年、別科6ヶ月の課程が置かれた。日本体育大学の前身である。

6、千葉医学専門学校は1901年4月1日文部省直轄諸学校官制改正勅令第24号により官立第一高等中学校から千葉医学専門学校として独立された。修学コースは医学科と薬学科があった。医科科は4年制、薬科科は3年制であり、千葉大学医学部の前身である。

7、早稲田大学清国留学生部は1905年9月に開設され、1910年9月、早稲田大学側は清国政府の「新しい留学生教育は日本人学生の教育と同じ」の要望に応え、清国留学生部が閉鎖された。修学年数は予備科1年、本科2年、合計3年であった。当時、留学生の教育機関は半年から1年という課程が主流であったのに対して、早稲田大学清国留学生部は1年以上、3年までの長期的な教育を行っていた。

8、張之洞『奏定学堂章程・学務綱要』 1904年

9、日本外務省第一課『外国官庁ニ於テ本邦人雇入関係雑件 清国之部 職掌其他応聘員数等調査』 1909年

10、南京大学校史博物館のホームページにあった「南大校史」の「六. 三江、两江的办学经费」

<https://historymuseum.nju.edu.cn/jypx/ndxs/ndxs/zydxjqqs19021949/dyzsjljsfxt19021912/lsljldbxfj/index.html> (2022. 10. 27の画面である)

11、「通師十年度支略」(『南通師範校友會雜誌』第4期 翰墨林印書局 1914年、pp. 1-34) によって作成した。

12、朱有燾「江蘇南通師範學校教員學生錄」『近代學制史料 第二輯 下』所載 pp. 309-310

華東師範大學出版社 1989年

13、「通州師範學校學課章程」(朱有燾『近代學制史料 第二輯 下』、華東師範大學出

版社、1989年、p. 316) 所載

14、「通師十年度支略」 (『南通師範校友会雑誌』第4期、翰墨林印書局、1914年、pp. 1-34) 所載

15、(朱嘉耀『南通師範学校史 第一卷 記事』、南京師範大学出版社、2012年、p. 194—195) によって作成した。

16、1907年、中国からの留学生を対象に東洋大学が開設され、1年間の速成教育を行ったが、1908年にわずか1年で閉鎖された。

17、法政大学は、1904年に中国からの留学生のための専門教育機関として設立され、法律と政治に関する速成教育コースを提供し、1906年に閉鎖された。2,117人が入学し、986人が卒業、卒業率は46.6%であった。

18、1938年、日中戦争で南通が陥落し、「通師」の建物がすべて破壊された。于忱と顧怡生は、海復鎮通州第二付属小学校に学校を移転することにした。この時期は、「通師」は「通州師範海復僑校」と呼ばれていた。

19、中国近代の国学者、革命家である。1906年、清国政府の迫害を受け日本に亡命した。中国同盟会が彼の歓迎会を開いた。

20、県学は、科挙試験時代の旧式学校である。科挙試験の第一級に合格した後、第二級の試験に備えるため、県学に入学することになった。

21、1901年、張謇は通海垦牧公司を設立した。1906年、張謇は通海垦牧公司の跡地に垦牧郷を設立し、1912年には垦牧郷は通州市の行政区となった。

22、『如皋县志』は明代から何度も編纂され、いくつかの版があるが、ここでは民国時代のものを指す。

23、日本で医学を学ぶ中国人留学生の論文発表の場として、中国医薬学会が日本で創刊した雑誌である。

24、1908年公布された『游学毕业生廷试录用章程』により、海外の高等教育機関で学位を取得した者は、帰国後、学部の審査・承認を経て、成績に応じて科挙試験の功名

を授与することになっていた。

25、医学留学生は、帰国後、学部の審査・承認を経て、成績に応じて「医学挙人」と「医学進士」という称号を授与することになっていた。

26、漢民族の裏切り者を指す。

27、張謇「致符鼎升函（1921年）」（『張謇全集』第3巻、上海辞書出版社、2012年、p. 850 所載）。この手紙の中で張謇は、当時の江蘇省教育庁長であった符鼎升到、熊輔龍を江蘇省立医科専門学校の校長に推薦すると書いてあった。

28、『體育』第155号 日本体育会 1906年 pp. 14-16

29、「会則」（『通州師範校友会雑誌』第1期 南通師範校友会 翰墨林印書局 p 13 所載）

30、「第一次校友会職員姓名表」（『通州師範校友会雑誌』第1期 南通師範校友会、翰墨林印書局 p 20 所載）

第3 張謇氏の日本人教習の誘致の考察

第3章では、2つの節に分け、張謇氏の日本人教習の誘致について考察する。第1節では、張謇氏が日本人教習を招聘した背景を考察し、その目的と理由を明らかにする。第2節では、本学・京都外国語大学の創設者である森田一郎氏の両親である吉澤嘉寿之丞氏・森田政夫妻に関する考察である。2人が中国に渡った経歴を調査し、張謇とどのように出会い、なぜ通州へ教師として渡ったのかを探り、中国での教育実践活動を総合的に考察し、当時の中国の新式師範学校、特に私立師範学校で教える日本人教習の実態を明らかにする。さらに、なぜ2人が日本に帰国後も中国人留学生の教育を続けたのかを検証し、本大学創設の背景の一端を浮き彫りにさせる。

(1) 日本人教習を招聘した背景

本節では張謇氏の日本人教習の招聘の背景について調査する。

1.1 「勸学篇」の発表

日清戦争で清国が日本に敗れたという悲劇を経験した中国側は日本の強さをはっきりと認識するようになった。清国の有識者は、欧米の科学技術を学ぶことから、日本に学ぼうという機運が高まった。

1903年に作成され、1904年1月に公布された「奏定学堂章程」は、日本の教育制度を取り入れたものであった。これに先立ち、この章程の著者である権臣・張之洞氏は、1898年に『勸学篇』を発表し、西欧よりも日本に留学した方が良いということを提言していた。以下は原文の一部を引用する(注1)。

至游学之国，西洋不如东洋，一、路近省费，可多遣；一、去华近，易考察；一、东文近于中文，易通晓；一、西学甚繁，凡西学不切要者东人已删节而酌改之，中、东情势风俗相近，易仿行，事半功倍，无过于此。

(留学先の国については、西洋は東洋(日本)に及ばない。1つは、距離的に近いの

で経費が節約でき、より多くの人を留学に送ることができること。もう1つは、中国に近く、訪問しやすい。一、東洋の言語は中国語に近く、理解しやすい。もう1つは、西洋の学問は非常に複雑で、西洋の学問が東洋に必要なところでは、適宜簡略化し、変更する。中国と日本は文化や習慣に似ているため、日本を模倣しやすいと思う。(これは蝦で鯛を釣るものである。)

「勸学篇」が発表された後、中国全土で日本に学ぼうというブームが起こり、多くの学生を日本に留学させたほか、官員や民間の有力者も日本を視察した。さらに、中国では日本人教習をたくさん招聘し、中国で教えるようになった。天津北洋師範学堂の主席教習であった中島半次郎氏の調査によると、1909年頃、中国で教えていた外国人教習は356人で、そのうち日本人教習は311人であった、という(注2)。

1.2 張謇氏が日本の教育制度への理解の需要

張謇氏の教育改革は、官職、官僚の世界を離れ、故郷で正式に実業と教育の道を歩み始めたところから始まった。1901年、張謇は新聞『申報』で「変法平議」を発表し、政治、経済、軍事、教育の各分野における自分の改革構想を提言した。

しかし、張謇氏の「変法平議」は1901年に出版されたが、教育改革に関する部分は、1872年に日本文部省が出版し実施した「学制」を参考にした可能性が高いと考えられる(注3)。1879年に日本文部省は「教育令」を公布し、「学制」は廃止されており、張謇氏の「変法平議」が引用した日本の教育制度は、実は20年以上遅れていたものである。

この頃、張謇氏はすでに「通師」の建設準備を始めており、その制度や規約の整備は、旧制度を踏襲していれば改革とは言えないものであった。それゆえ、日本の最新の教育制度を採り入れ、それを基準として「通師」の最も適切な規則を策定することが最も重要であるという張謇氏の意図が窺える。

それに加えて、日本の学校制度を深く理解することは、張謇にとって非常に重要なことであった。張謇氏は「変法平議」の普興学校の項で次のような指摘があった。(注4)

为中国今日计，不独当师其改定之法，亦当深知初定之意。

(今日の中国のためには、その改訂した章程を模倣するだけでなく、章程を制定する初心を深く理解することも重要である)

以上のことから、張謇氏は日本の現行していた学校制度を模倣するだけでなく、過去の法令からも学びたいと考えていたことがわかる。しかし、張謇氏自身は、新式の教育を受けたこともなく、留学した経験もないので、外国の情報を得る能力に優れていたわけではない。この頃、張謇氏は日本の学校制度について、主に当時の新聞や雑誌に掲載された翻訳本から学んでいた。また、張謇氏は直接、日本を訪れるのも良い手段だと考えていたに違いない。それが、氏が1903年に日本を訪問した理由の一つであったと筆者は考えている。しかし、「通師」の開校が目前に迫っており、張謇が検討する時間はほとんどなかった。それゆえ、日本人専門家に依頼して一緒に相談するのも良い選択であると考えていたに違いない。

張謇氏が「通師」に招いた最初の日本人教習は、木造高俊氏と吉澤嘉寿之丞氏であった。木造高俊氏は東京帝国大学漢文専科を卒業した後、当時日本人が中国に設立した東亜同文書院の教授で、清国諸制度及び律令という科目を担当していた。

このような才能持ちの人材は、まさに張謇氏のニーズに合うものであり、彼が「通師」にもたらす変化を楽しみに期待していた。しかし、悲しいことに、1906年6月、張謇氏が日本を訪れ、実業と教育など、日本の実態を考察し、帰ろうとしたその時、木造高俊氏が南通で自殺してしまった。

1.3 通州師範学校の総合学校への発展

張謇氏の「通師」も、1903年の創立当初から多くの日本人教習を採用した。下表は「通師」に勤務した日本人教習一覧表である（注5）。

表9 通州師範学校に勤めた日本人教習一覧表

名前	勤務時間	担当科目
木造高俊	1903. 3～1903. 6	日本語
吉澤嘉寿之丞	1903. 3～1906. 1	算数・理科
森田政	1904. 3～1907. 2	女子師範教習
遠藤民次郎	1904. 1～1904. 8	算数・地理
西谷虎二	1904. 1～1914. 12	日本語・教育
木村忠治郎	1904. 8～1911. 1	教授法
宮本幾次	1907. 3～1909. 1	測量
照井喜三	1908. 2～1909. 1	農科

上記の表からわかるように、「通師」に採用された日本人教習は、師範教育の分野だけでなく、工学や農業などの職業教育の分野の教習も何名かいた。そこから張謇氏の先見性が窺え、「通師」の総合学校への継続的な発展につながるものであると張謇氏が考えていたに違いないと筆者は見ている。

「通師」は、最初は小学校の教員育成、南通地域の教員不足の問題解決を目的として設立された初級師範学校であった。その後、師範科のほかに、測絵科（測量製図科）、農科、桑虫（養蚕）科、工科などの専門学科も設立され、附属小学校も多数設立されていた。

基礎教育の普及に加え、附属小学校の設立は師範科の学生に実習の場を提供するためでもある。『通州師範学校学課章程』には、師範科の学生の実習時間が定められてお

り、4年生は週4時間となっている。師範学校が小学校を併設していることはよくあるが、複数の専門学科を持つことは当時、あまりなかった。

当時、第一高等学校のような日本の教育機関では、芸術、科学、医学など、複数の分野も設けられていた。しかし、日本の官立高等学校は日本政府の大学予科という位置づけによるものであるゆえ、専門科を設立し、大学に進学したい人に専門課程を提供するというシステムとなっていた。しかし、中等教育レベルの教育機関である通州師範学校の卒業生は、直接大学に進学するわけではないため、通州師範学校の専門科目は日本の大学予科のそれとは違うものである。

実は、「通師」に専門学科を幾つか設置したことは、張謇氏の地方自治や企業経営とも結びついていた。

1901年の『変法平議』の中で、張謇は測量や地図製作の人材を優先的に育成する必要性を訴えていた。以下は原文の一部を引用する。

一学堂先学画图

…图，固变法之轨道哉！測量、画图之学，本不能深，学以半年，即能成就。

(改革のひとつが、学校ではまず絵を教えること。

…図は改革の軌道だ！測量製図の学問は奥が深いものではないが、半年も勉強すれば習得できるものと思う。) (注6)

その時、張謇氏は測量や製図の重要性を認識しながらも、それを習得することの難しさを甘く見ていた。それに加えて、張謇氏は小学校で測量や地図を学べば十分だと考えていた(注7)。筆者は、この改革案は、あくまでも理想論と見ている。張謇氏もこのプログラムの理想主義を意識してか、教育改革を実施するためのモデルとしては使わなかった。

1906年、「通師」に測絵科(測量製図科)を設置し、測絵(測量製図)人材を育成し、

南通の測量製図事業を発展させた。その前に、「通師」の師範科では、製図や算数も設置しており、ある程度、測量や地図作成を勉強するための基礎となった。一方、測絵科（測量製図科）は、外部からの学生の募集に加え、師範科から数学の得意な学生を選んで入学させたケースもあった(注8)。

しかし、その後、測絵科（測量製図科）は専門の教習がない状況に直面し、1906年9月と1907年2月には、測絵科（測量製図科）の科目は師範科と変わらなくなった。そのため、張謇氏は、日本人・宮本幾次氏を雇い、測絵科の専門科目を担当してもらった。

1908年、「通師」に工科が設置され、さらに測測絵科から9人の卒業生が選ばれ、工科で学ぶことになった。教習は引き続き宮本教習が担当した。工科の設立は、張謇氏の「実業による国を救う」という理念と密接に関係していると筆者は考えている。

1905年、張謇氏は「請設工科大学公呈」の中で、「日本崛起先図工業」（日本の興隆は工業が先行することによる）と、国を発展させるには工業の発展という重要性に触れていた。また、「苟欲兴工，必先兴学」（工業を発展させるには、まず学校を創設しなければならない）、「不至如今日实业之擿埴冥行，瞎骑盲进」（今の実業のように暗中摸索しながら、盲目的に進むとは異なる）と訴え、工学は実業発展のための指針のようなものだと指摘した(注9)。しかし、この提案は採用されなかった。南通地域の民間資本だけで大学を設立することは現実的ではないこと、既存の「通師」に工科を設置することが、自分自身の改革案を実行する重要な方法と張謇氏が認識しただろう。

農科は、1907年に「通師」の4つの専門学科の中で最も長い3年の修学年数で設立された。1909年、さらに虫桑科を設立し、修学年数は1年であった。どちらも、張謇氏の大生紗廠の発展のために設立されたものである。大生紗廠の原料問題を解決するため、張謇氏は通海墾牧公司を設立したが、当時は農業管理経営者が不足していた。それゆえ、張謇氏は1907年「通師」に農場を併設し、農学に関する一連の設備に次々と投資した。さらに、師範科の学生には、農業科目を必修とすることが規定されてい

た。1908年、「通師」は日本の農科大学（注10）を卒業した照井喜三氏を農科の主任として採用した。

清朝末期の数年間、張謇氏の地方自治と企業経営の二兎を追う形で発展した「通師」は、張謇氏の教育改革の思想に則り、師範科以外の科目も数多く設け、総合学校に向けて発展し続けたと筆者は考えている。その結果、「通師」に採用された日本人教習は、師範教育の分野だけにとどまることはなかった。

(2) 吉澤嘉寿之丞氏・森田政夫妻と張謇氏とのかかわりの調査

本大学・京都外国語大学の創設者である森田一郎氏の両親、吉澤嘉寿之丞氏・森田政夫妻は120年前張謇氏に招かれ、中国に渡った。通州地域で10年以上教鞭をとっていた。本節では吉澤嘉寿之丞氏・森田政夫妻と張謇氏とのかかわりを調査し、本大学創設の背景の一端を浮き彫りにさせる。



吉澤嘉寿之丞氏・森田政夫妻

2.1 吉澤嘉寿之丞氏・森田政夫妻の調査

2.1.1 吉澤嘉寿之丞氏・森田政夫妻の経歴

吉澤嘉寿之丞氏は1874年富山市生まれ、1896年7月東京物理学校「現・東京理科大学」を卒業した後、東北帝国理科大学（注11）に進学し、同校を卒業した後、旧制

会津中学校（現福島県立会津高等学校）の数学教師に赴任した。森田政と結婚した後、母校・東京物理学校の推薦により、明治法律学校高等予科（注12）の数学教師を担当していた。1903年に妻の森田政氏、長男の一郎とともに、中国の通州（現在の南通市）に着任し、1903年から1906年まで通州師範学校で物理、化学、算術を教えていた。1906年1月に通州城北高等小学校（張謇氏が創設した小学校。現・南通実験小学）に転勤した。1906年8月から吉澤氏は如皋師範学校の教習をも兼任し、数学、理科、図画などを教えた。1907年、長男の森田一郎が小学校に入学するため、家族と共に日本に一時帰国した。

1908年再び通州に赴き、如皋師範学校の教習に正式に就任し、同校で1914年まで教えていた（注13）。1914年帰国後、吉澤嘉寿之丞氏は、松本亀次郎氏、杉栄三郎氏と共に東亜高等予備学校を共同設立し、中国人留学生に教えた。中華人民共和国の初代首相である周恩来など、のちに中国近代史上の名人になった多数の人はこの学校に留学していた。

森田政氏は1880年、福島県会津若松市生まれ。生家は代々会津藩に出仕した。士族の子女として厳格な家庭教育を受け、女子師範学校である東京和洋女子学校の「和裁専攻」を終えると、会津若松の小学校に訓導として務めた。

吉澤嘉寿之丞氏と結婚した後、1904年、夫、長男森田一郎と共に中国・南通へ、張謇が創設した「抚海垞家塾」（注14）、通州女子師範学校の教師として赴任した。南通の幼児教育、女子教育の開拓者として名をあげた。1906年、張謇氏は、通州師範学校附属の女子師範学校を設立し、森田政氏は女子師範学校の教習として算数、唱歌、体操などの科目を担当していた。1907年家族と共に帰国した。長年にわたり、子供の養育の傍ら、夫・吉澤嘉寿之丞の業を助け、中国最初の私立師範学校、中国最初の私立女子師範学校、南通地域の教育事業の発展に貢献された。

2.1.2 中国に渡った理由の検証

先行研究では、吉澤氏は東京物理学校で出会った王国維に推薦され、通州師範学校で教鞭をとっていたという説がほとんどであった。張謇氏の『柳西草堂日記』によると、1903年3月1日、王国維氏は木造高峻氏、吉澤嘉寿之丞氏とともに通州師範学校に着任した（注15）。吉澤氏は王国維氏とともに通州師範学校に到着し、二人とも東京物理学校の校友であることは、先行研究ではこれを根拠に、通説とされている。

しかし、王国維氏が東京物理学校に短期留学したのは、吉澤氏が東京物理学校を卒業した5年後の1901年であり、このほかにも、木造高俊氏もその時、この二人と共に通州師範学校に到着したため、この説はなお議論する余地があると筆者は考えている。

吉澤氏がなぜ中国に来たのか、どのようにして張謇と出会ったのか、明確な記録は残っていないが、下記の仮説も考えられる。

南通での教習時代、吉澤氏は2度ほど母国に帰った。一回目は、1903年6月、木造高俊氏が自殺し、その影響か吉澤は中国を離れ、1904年2月、妻の森田政とともに南通に戻った。二回目は、1907年に息子の森田一郎を日本の小学校に通わせるため、再び日本に帰国した。吉澤氏は、2回の帰国中、明治大学で教鞭をとっていた。本大学の最高顧問であった森田嘉一氏（吉澤嘉寿之丞氏・森田政の孫）の口述によると、吉澤氏は明治大学が運営する中国人留学生のための特別教育機関「経緯学堂」の数学教師としても働いていた、という。

明治大学は近代における日本でいち早く中国人留学生を受け入れた教育機関の一つであり、その教員も大勢中国に招かれていた。吉澤氏は1900年頃から明治大学予科の教師をしていたが、1903年頃、明治大学は「経緯学堂」設立の計画を立て、教員を中国に派遣して考察していた。それゆえ、吉澤が中国に渡ったのは、明治大学で働いた時周囲の影響を受けてのことであった可能性が高いと筆者は主張している。

2.1.3 森田政氏の音楽教育実践

「学堂楽歌」（日本の「唱歌」にあたる）は、中国における近代音楽教育の始まりで

ある。戊戌の変法では、梁啓超が心の啓発のために音楽教育の重要性を説いた(注16)。清朝末期、中国の教育が徐々に近代化されていく中、新式学校でも「学堂楽歌」が重要な科目として推進された。そして、「学堂楽歌」では、最初は日本の学校の「唱歌」を模倣することで発展してきた。その多くは、当時日本に存在した歌謡曲の曲譜をそのまま使用し、新しい歌詞に書き直したものである。

銭仁康(2001)の「学堂楽歌考源」(注17)と沈心工(1912)の「重編学校唱歌集」(注18)では、張謇が作曲した「学堂楽歌」がいくつか収録されている。「池中之金魚」「風車歌」、「蓮華歌」、「池中蒲」などがそれであるが、実は「池中之金魚」「風車歌」、「蓮華歌」は森田政の作品である。

張謇氏の日記によると、張謇氏は森田政とともに歌を創作した。下記はその日記の一部である(注19)。

森田教師欲編二歌，为述其意，用汉文编之：《池中之金魚》：风吹池面开，一群金魚排。小魚摆摆尾，大魚喁喁腮。白魚白玉琢，紅魚紅錦裁。我投好食不須猜，和和睦睦来来来。又《蓮華歌》、《風車歌》。《蓮華歌》仍日本之旧，而尾易中国俗语；《風車歌》则更制：風車兮風車，圓轉兮不差。風之亟亟兮，車之捷捷兮。人心不息兮，風車不息兮。

(森田教師は二つの歌を作りたいと思っている。その歌の意味を伝えるために、中国語で編集してあげた。「池の中の金魚」：風吹池面開，一群金魚排。小魚擺擺尾，大魚喁喁腮。白雨白玉琢，紅魚紅錦裁。我投好食不須猜，和和睦睦來來來。また「蓮華歌」「風車歌」を作った。「蓮華歌」は日本の歌だが、文末中国の俗語を使っている。「風車歌」の歌詞は風車兮風車，圓轉兮不差。風之亟亟兮，車之捷捷兮。人心不息兮，風車不息兮、といったように替えた。)

「蓮華歌」の楽譜は現在失われているが、残りの2曲については、以下に説明する。

2.1.3.1 「池中之金鱼」

以下は「池中之金鱼」の楽譜である（注20）。



図7 「池中之金鱼」の楽譜

森田政氏によって作られた「池中之金鱼」について、日本の歌の歌詞を変えただけなのか、森田政氏が自ら作られたのか、について大阪教育大学名誉教授・松村直行氏（明治、大正の童謡・唱歌研究）に確認してもらった結果、明治時期にこのような日本の童謡はなかったことが分かった。

張謇氏の日記の内容と合わせると、森田政氏が自ら作曲し、張謇氏とともに歌詞を創作し、共作した可能性が極めて高いと筆者は主張する。そして、「池中之金鱼」は現在、中国最初の「学堂楽歌」と認められた。

2.1.3.2 「風車歌」

森田政氏が書いた「風車歌」の楽譜はまだ見つかっていないが、モデルとなった日本で流行しているものと、中国語の翻訳本が見つかった（注21）。



図8「風車」の楽譜

張謇氏の「風車歌」の歌詞は原曲を模倣したものに見えるが、最後に「人心不息兮」というフレーズが加えられていることで、歌の意味がより高いレベルに引き上げられていると筆者は考えている。

しかし、張謇氏の創作した歌詞は原曲とともに歌えない。それゆえ、森田政氏は曲を作り直してから歌えるようにした可能性がある」と筆者は見ている。

2.1.3.3 「学堂楽歌」を作った理由

森田政氏は、金魚と風車をテーマにした曲を作った理由について、筆者は以下のような調査を行っていた。

森田政氏の家は代々会津藩の役人であり、士族育ちの彼女は会津に愛着していたのは当然である。会津の伝統民芸品である「起こり小法師」「風車」「初音」の三つは、『会津三縁起』として親しまれていた。400年ほど前、当時の会津藩長・蒲生氏郷が、役についていない藩士に作らせて、正月に売り出したのが始まりだと伝えている（注22）。会津の「起こり小法師」中で最も古く、最も有名なのが会津張子である。一方、会津張子の中、金魚はよく題材として用いられている。それゆえ、森田政氏が風車と金魚をテーマにした曲を作って、故郷会津の文化を中国南通に伝える可能性が非常に高いと筆者は考えている。

2.2 張謇氏とのかかわり

張謇氏の日記や書簡には、日本人教習に関する記述はほとんどないが、幾つかの史実から、また吉澤嘉寿之丞氏・森田政夫妻に対する態度から、張謇氏とのかかわりの一端が窺える。吉澤・森田夫妻と張謇氏とのかかわりについて、筆者は以下のような調査を行っていた。

2.2.1 張謇氏の吉澤嘉寿之丞への不満の検証

吉澤嘉寿之丞氏・森田政夫妻と張謇氏とのかかわりについては、先行研究において、劉佳氏（2018）は、木造高俊の自殺の影響で、吉澤が帰国後長い間通州に帰れなかった。そのため張謇氏は王国維氏への手紙で「其甚不守信義」（彼は約束を守らない）と相当怒ったことが分かる。劉佳氏はこの手紙から、吉澤が張謇に背信行為をしたため、張謇が不満していたと指摘している（注23）。しかし、この見方は厳密ではないと筆者は考えている。

1904年2月、夫の吉澤とともに南通に渡った森田政氏は、当初は正式な教習とは言えないと思われる。また、彼女が勤務していた「抚海垞家塾」は、新式学校とは言えなかった。森田氏が最初に就いた仕事は、教習というより保母、家庭教師に近いと筆者は考えている。

張謇氏は、かつて日本の友人である内藤湖南氏と西村天囚氏に、師範教習と保母を探してくれるよう頼んだことがある。1903年、張謇氏が来日した際にも、この事について2人と手紙で伝えた。以下は原文の一部を引用する（注24）。

师范教习及保母二事，归后一月，必有书来。惟目前经济实属困难，师范教习和田君月俸可否略减？…至下走前拟订请折井夫人之合同，既经折井君酌量增减，其如何措词，亦请由西村先生先行见寄。

（日本から帰国して1ヵ月後、師範教習と保母の募集について手紙を送りたかった。ただし、今は本当に資金不足なので、師範教習和田くんの月給を下げることはできないだろうか？…出発前に折井夫人に提案された契約については、折井氏の裁量で増額・減額されていたが、西村様に文言の整理をお願いしたいと思う。）

以上のことから分かるように、張謇氏は和田君を師範教習に、折井夫人を保母に招

く予定だったが、資金不足であったため、この2人の給与を下げるよう交渉していた。そのためか、和田君も折井夫人も、結局は中国に行くことができなかった。こうして、張謇氏の日本人保母採用の計画は失敗に終わった。張謇氏の失望感も見られる。

1904年2月、吉澤氏は妻の森田政氏、子供の森田一郎を連れて南通に到着し、その後、森田政氏、張謇氏の息子張孝若の保母兼家庭教師となった。張謇氏は、めったに自分の家で宴会を催さないが、吉澤氏一家を招き、珍しく自分の家で歓迎宴を開いた。そこから張謇氏の喜びを感じることができる。

王国維氏に宛てた手紙で吉澤氏に不満を表明した時期は1903年9月12日、もし吉澤が1903年6月に中国を離れてから、わずか3ヵ月しか経っていなければ、教育改革を決意した張謇は吉澤にあれほど腹を立てることはなかったと思われる。この時期、張謇氏が日本人家庭教師や日本人保母の招聘を計画していた。吉澤氏は南通に到着し、この計画を知り、張謇氏に妻の森田政を推薦し、帰国して森田政氏を動員して一緒に南通に行った可能性が高いと筆者は主張している。しかし、当時、吉澤氏の子供が生まれたばかりで、しかも木造高俊の自殺があったため、張謇との約束は期限切れとなり、張謇氏は、日本人教習や保母の招聘の失敗で落ち込んだ時期に、吉澤への不満を示したのだと筆者は考えている。

2.2.2 張謇氏の吉澤・森田政夫妻への優遇

通州師範学校は、張謇が教育改革を行っていた清朝末期には資金不足に陥っていたが、張謇氏は日本人教習をかなり優遇していた。通州に家族を連れてきた吉澤氏を非常に好意的に扱った。吉澤が外出するときは、いつも車夫を手配して送迎していた。張謇氏は宋龍淵との手紙で、「送吉澤先生之车夫既不认识路，又不明白，可恨。吉泽此次大苦」（吉澤さんを乗せた車夫は道を知らず、理解できず、憎らしい、吉澤さんは今回非常に苦しんだ）と述べ、吉澤氏への関心を表していた（注25）。

このほか、一部分の史料の細部から、張謇氏が吉澤・森田政夫妻をいかに好意的に

扱っていたかが見られる。本大学の創設者である森田一郎氏は、2歳の時に両親の後を追って中国に渡り、日本に帰ってきたのは1907年のことである。1906年、森田一郎が5歳で小学校に入学する頃、張謇氏は吉澤氏を通州城北高等小学校の教習に転任することになった。しかし、森田一郎氏は中国での生活が長かったため、日本語もあまり上手ではなかった。本大学の最高顧問である森田嘉一氏は「父は日本語が少し不自由になっていたとのことで、小学校の先生に預けられ、日本語の勉強をしたそうです」と述べていた(注26)、それゆえ、1907年吉澤氏が森田一郎氏を日本に連れ帰り、教育を受けさせたと見られる。

2.3 吉澤嘉寿之丞氏・森田政夫妻帰国後と張謇氏の交流

1914年に帰国した吉澤は、中国人のため教育活動を継続し、松本亀次郎氏、杉栄三郎氏と共に中国人留学生専門教育機関である東亜高等予備学校を共同で設立した。

残念ながら張謇氏と吉澤家の連絡は、戦争のために途絶えざるを得なかった。しかし、吉澤家の子孫たちは、張謇氏との接点を探すことを諦めなかった。2018年5月6日、本校最高顧問である森田嘉一氏(当時は本大学の理事長)が通州師範学校の後継校である南通師範高等専科学校を訪問し、張謇氏の曾孫である張慎欣氏とも面会した。その後、両校の交流・協力に関する協定が結ばれ、80年以上途絶えていた交流が再び結ばれた。張謇の教育改革活動は、当時の中国教育の近代化に貢献しただけでなく、100年後の日中間の教育・文化友好の架け橋となったのであると筆者は考えている。

注

- 1、張之洞「遊学第二」 『勸学篇』 所載 1898年
- 2、汪向荣『日本教習』 三聯書店 1988年 p. 66
- 3、劉佳『張謇の南通における近代教育普及への貢献：日本モデルの教育制度の受容を中心に』(東京学芸大学博士論文) 2019.9.25 pp. 41-53

4、張謇「変法平議(1901年)」『張謇全集』第4巻所載 上海辞書出版社 2012年 pp. 34-62

5、「通州師範学校と教科書疑獄—論張謇的人才観—」 劉佳 『中国史跨学科博士生論壇文集』 pp. 270-293。

原表は森田政が掲載されていなかった。しかし、この時期、通州女子師範は通州師範の附属校であるため、筆者は森田政に関する部分を補足した。

6、張謇「変法平議(1901年)」 『張謇全集』第4巻所載 上海辞書出版社 2012年 pp. 49-50

7、張謇「変法平議(1901年)」 『張謇全集』第4巻所載 上海辞書出版社 2012年 p. 50

8、孫模「西谷虎二与孫子鈇」 『読雪斎文選』 南通市文学芸術界連合会編 2011年 pp. 457-458

9、張謇「请设工科大学公呈(1905年)」 『張謇全集』第1巻所載 上海辞書出版社 2012年 p. 100

10、明治時代の帝国大学令によって設置された農学の分科大学

11、東北大学の前身である東北帝国大学は1876年にスタートした「札幌農学校」を大学に昇格させた「農科大学」と、仙台の地に新しく造られた「理科大学」という二つの大学からなっていた。

12、本大学の最高顧問であった森田嘉一氏(吉澤嘉寿之丞氏・森田政の孫)の口述は“明治大学予科”と言った。しかし、明治大学は1903年に明治法律学校から改称され、吉澤氏はこの頃ですでに中国に行っていたので、彼の勤務地は明治法学校高等予科であると筆者は考えている。

13、曹炳生と都樾編『吉澤嘉寿之丞和森田政夫婦在南通任教档案資料集』(非売品)、2018年

14、1904年、張謇が自宅に設立した小さな学校で、現代の幼稚園にあたる。

- 15、張謇「柳西草堂日記」 『張謇全集』第8巻所載 上海辞書出版社 2012年 p. 532
- 16、張静蔚「張謇と学堂楽歌」 『音楽芸術』(上海音楽学院学報)所載 2003年第2期 pp. 22-26+4
- 17、錢仁康「学堂楽歌考源」 上海音楽出版社 2001年
- 18、沈心工「重編学校唱歌集」 文明書局 1912年
- 19、張謇「柳西草堂日記」 『張謇全集』第8巻所載 上海辞書出版社 2012年 p. 579
- 20、張静蔚「張謇と学堂楽歌」 『音楽芸術』(上海音楽学院学報)所載 2003年第2期 pp. 22-26+4
- 21、張静蔚「張謇と学堂楽歌」 『音楽芸術』(上海音楽学院学報)所載 2003年第2期 pp. 22-26+4
- 22、会津若松観光物産協会のホームページ「八重の生活にもなじみのあった、新年を祝う会津の伝統民芸」。
<http://www.yae-mottoshiritai.jp/seishin/sanengi.html> (2022. 11. 11 の画面である)
- 23、「通州師範学校と教科書疑獄—論張謇的人才観—」 劉佳 『中国史跨学科博士生論壇文集』 pp. 270-293
- 24、張謇「致内藤湖南氏西村天囚函」 『張謇全集』第2巻所載 上海辞書出版社 2012年 pp. 124-125
- 25、張謇「教育手牒」 『張謇全集』第3巻 上海辞書出版社 2012年 p. 1413
- 26、河島順一郎「和と不撓不屈と—ある会津人夫婦の挑戦—」 『歴史街道』2012年第6期所載 pp. 122-126

結論

本研究では、日本人教習の誘致や日本の教育制度の受容を中心として、清朝末期の中国教育の近代化過程における中国江蘇省通州の中心人物である張謇氏の教育改革活動を考察したものである。主に張謇氏が残した手紙・日記や公文書、当時の新聞や雑誌と中国や日本の教育関連の諸条例、さらに張謇氏が招聘した日本人教習の子孫の口述筆記などに基づいて調査したものである。

本研究の考察を通して、次のようなことを明らかにした。

1、張謇氏の教育改革に関して

(1) 清朝末期の教育制度

清朝末期、中国は次第に半植民地・半封建社会になり、その結果、1840年以降、中国社会の国を救うための活動が活発していた。教育の分野では、洋務派が様々な外国語教育機関や軍事教育機関を作ったが、制度方面の改革には触れなかった。日清戦争後、日本から学ぶことが主流になった。教育分野では、日本教育制度の導入、新式学校の創設により、教師に対する需要が高まった。また、教師不足の問題を解決するために、師範学堂の数も急速に増えていた。つまり、近代師範学堂の創設は、張謇氏だけの考えではなく、時代の流れでもあったと筆者は見ている。

(2) 張謇氏の社会的地位と権力

新旧の時代の交差点に位置する人物として、張謇氏の教育改革や地方自治の活動は常に新旧両方の特徴を伴っていた。時代の変化がもたらす新旧の思想の衝突とは別に、張謇氏の社会的地位と権力は彼自身が新しい思想を受け入れようとした際、プラスになった面もあり、また逆に制約された面も見過ごすことはできない。

張謇氏の教育改革を行う権力が、清国政府との密接な関係に基づくものであったことである。このように張謇氏自身、一度は政治から距離を置こうと思ったが、実際、初期の幕僚時代から、「状元」称号を受けた短い官員生活においても、教育改革や地方

自治の際に推進した共和議会制度においても、常に清国政府と良好な関係を保っており、政治とは切っても切り離せない存在であった。政府から与えられた権力は張謇の教育改革と産業の発展を保障したが、同時に彼の改革の幅を狭めることにもなった。それゆえ、清末期における張謇の教育改革は、常に清朝政府が許す範囲内でしか展開されなかったものであると筆者は主張する。

(3) 日本人教習の誘致

清朝末期の学制改革の過程では、日本の学制の導入が大きな比重を占めた。その結果、外国人教習のなかで日本人が断トツ多かった。

教育改革を推進していた過程で、張謇氏は日本の現行していた学校制度を模倣するだけでなく、過去の法令からも学びたいので、張謇氏は、日中双方の法令に精通した木造高俊氏を教習として南通に招いた。このほか、張謇の教育改革の多くを担っていた通州師範学校は、張謇がさまざまな改革思想を実現するために必要とされ、次第に総合学校へと発展していった。

「通師」に採用された日本人教習は、師範教育の分野だけでなく、工学や農業などの職業教育の分野の教習も何名かいた。そこから張謇氏の先見性が窺え、「通師」の総合学校への継続的な発展につながるものであると張謇氏が考えていたに違いないと筆者は主張する。

2、通州師範学校の日本留学生に関して

(1) 資金不足による臨機応変の措置

日本留学生の派遣の要因について、中国初の民間資本による独立運営の「通師」は、設立当初から政令や資金不足で深刻な教師不足に悩まされた。この問題は、日本人教師や日本の高等教育機関を卒業した日本人を教習として雇うという違法行為によって一時的に緩和され、南通で日本の教育制度や教科書などが徐々に導入され始めたが、特に張謇氏の地方自治と教育改革が進むにつれて、日本語の堪能な中国人人材、高度

な知識を備える南通の現地人材の需要が急速に高まってきた。これらの問題を解決するために、「通師」側は3回に分けて学生や教習を日本に派遣したと見られる。

1回目の派遣された学生らは全員、公費で1年間の速成教育機構に留学した。2回目の「通師」の留学生派遣は、教員補充の目的だけでなく、教員の専門性を高めることが求められていたからである。また、張謇氏の地方自治事業における医療開発のニーズに応えるため、西欧の医療技術を学んでもらう目的で医学生も派遣した。3回目の2人は、すでに教習として働いていたため、学校経営や教育行政を学ぶことが主な目的であった。それゆえ、長期留学ができる留学生向けの教育機構を選択したと見られる。総じて、3回にわたる日本への留学生派遣は、「通師」の発展や張謇氏の教育改革の展開に応えるものであると筆者は主張する。

(2) 南通の教育近代化への影響

「通師」のような中国最初の師範系の私立学校は、公立学校と比較して、資金不足に常に悩まされていたが、「通師」は近代中国において、多くの公立学校よりもはるかに優れた師範教育のモデルとして注目されていた。張謇氏の人材育成、当時、日本で行われていた中国人留学生に対する速成教育は、しばしば批判されていた。張謇氏と「通師」側は、速成教育を選択したことは資金不足と教師不足という二重の圧力でやむを得ない選択だと考えられる。張謇氏は、これらの学生に帰国後、教習だけでなく管理者の重任も任せており、教育改革事業のリーダーとして育成する狙いがあると考えていたと筆者は見ている。その結果からみれば、これらの留学生の多くは張謇氏の期待に応え、教育現場だけでなく、張謇氏の教育改革や南通の教育近代化に大きな貢献をしていた。

3、吉澤嘉寿之丞氏・森田政夫妻の近代史における位置付け

本学の創立者である森田一郎氏の両親、吉澤嘉寿之丞氏・森田政夫妻は、120年前に張謇氏に招かれて中国に渡り、10年間南通に在住し、教習を務め、日本の先進的な知

識を中国に伝えていた。吉澤氏は、張謇が最初に採用した日本人教習の一人となり、通州師範学校に先進的な理科教育の理念をもたらしただけでなく、張謇氏が女子教育や幼児教育を展開する際に、妻の森田政を連れて中国に赴き、張謇の教育改革事業を手助けた。

日本に帰国した後、吉澤嘉寿之丞氏・森田政夫妻は中国人留学生の教育の道に進み、中国と日本の架け橋となった。両親の死後、その子供である森田一郎氏は、京都に外国語大学を設立し、積極的に留学生を受け入れ、学生同士の国際交流を図った。これはすべて、120年前に両親とともに中国で張謇の教育改革と繋がることに起因していると筆者は考えている。

以上のことより、吉澤・森田夫妻の近代史における位置づけは、単に教師として中国に渡り、中国の師範教育への貢献ということだけではなく、日中間の友好・交流の中で重要な役割を占めているのであると筆者は評価する。

参考文献

(日本語文献)

- 1、東洋大学編『東洋大学創立五十年史』東洋大学 1938年
- 2、阿部洋『中国の近代教育と明治日本』福村出版 1990年
- 3、東京物理学校編『東京物理学校五十年小史』東京物理学校 1930年
- 4、阿部洋編『日中関係と文化摩擦』巖南堂書店 1982年
- 5、邵艶・船寄俊雄「清朝末期における留日師範生の教育実態に関する研究—宏文学院と東京高等師範学校を中心に—」『神戸大学発達科学部研究紀要』第10巻第2号所載 2003年
- 6、劉佳「張謇の南通における近代教育普及への貢献—日本モデルの教育制度の受容を中心に—」東京学芸大学博士論文 2019年
- 7、高木理久夫、森美由紀「早稲田の清国留学生—『早稲田大学中国留学生同窓録』の記録から—」『早稲田大学図書館紀要』第62号所載 2015年
- 8、見城悌治「明治～昭和期の千葉医学専門学校・千葉医科大学における留学生の動向付 千葉医専留学生・辛亥革命紅十字隊関係史料」『国際教育』第2号所載 2009年3月
- 9、蔭山雅博「清末江蘇省における「日本型」学校制度の導入過程—張謇の活動を中心として—」『国立教育研究所紀要』第121集所載 1992年
- 10、横井和彦・高明珠「中国清末における留学生派遣政策の展開—日本の留学生派遣政策との比較をふまえて」『経済学論叢』64(1) 同志社大学 2012年
- 11、孫倩「清末留日学生の教育機関—早稲田大学と法政大学を中心に—」『社会研論集』第20期所載 早稲田大学 2012年

(中国語文献)

- 1、張謇『癸卯东游日记』翰墨林印書局 1903年

- 2、張孝若『最艰难的创业者 状元实业家 张謇传』 新世界出版社 2016年
- 3、朱嘉耀『南通师范学校史 第一卷 纪事』 南京師範大学出版社 2012年
- 4、張謇『張謇全集』全8卷 上海辞書出版社 2012年
- 5、章開沅『張謇伝』 浙江古籍出版社 2021年
- 6、大清律例館編『大清律例汇编便览』29卷 1903年
- 7、周新国・張慎欣編『張謇辞典』 広陵書社 2021年
- 8、叶志如「清末学政学务章程史料」. 『历史档案』, 1989(02):52-60+41. p53「付:教育会章程清单」
- 9、『通州師範校友会雜誌』第1-7期、南通師範校友会、翰墨林印書局、1911-1917年
- 10、孫模『読雪斎文選』 南通市文学芸術界連合会 2011年
- 11、郭秉文『中国教育制度沿革史』 福建教育出版社 2007年
- 12、王建明・宋方・孫模『南通県教育誌』 新華出版社 2001年